

平成27年（西暦2015年）3月

瞑想録（その5）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」という立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

## 1、意味を理解する（その2）

意味を理解すると言う行為の本質、当ブログのテーマである「連続体（点ではなくマスや塊で物を見る）と蓋然論理（絶対ではないが良く当たる論理）」にとっても、あるいは人間理解一般にとっても、極めて重要なテーマである。当ブログはこのテーマに、あたかもお釈迦さまがそうしたように、あるいは無垢な原住民族がそうするように、主として体験と瞑想に依って知ろうとしている。「体験と瞑想に依って」と言うことは言い換えれば、「科学的手続きに依らないで」と言うことである。

ここまでの各方面からの瞑想で見えてきた「理解する」とは、以下の通りである。すなわち、「対象物（有体物とは限らない）を、それから導出された主要なタグとともに、その脳空間（線形空間ではない）内での位置づけが、特に本能や既存の他の連続体及びそのタグとの関係で、「ほぼこの辺」と位置決めできるに至ることを言う」と定式化できる。「ほぼこの辺」が定まった瞬間に人の脳が「アハ！」と喜びの信号を出すのだ。

世の中では「理解とは既得概念への当てはめと比較である」とする見解が良く見られる。たしかにこう言うケースは多いだろうが、こう言う「おとなしい」ケースだけでなく、「本能的に好かない」とか「想定外事象でパニックながらも切り抜ける」とか「ポンと突

然悟りに至る」と言った、当てはめを越えた理解も結構あり、かつそれらの方がよほど面白い。キーワードは脳空間内での位置決めである。

この場合タグ（指標の芽）は、全部合致するなどと言う調子の良いことはめったになくて、むしろ主要指標の合致を以て理解とする。これは人の心の本質が矛盾にあることに起因する。ポンとうまくはまる、それもジグソーパズルのピースがはまるようにはまるのは、ミッシンリンクが繋がったような特別な場合である。通常のはまり方の場合、そのはまり方が深いほど、また主要タグの合致が多いほど深い理解となり、脳空間内にどうしてもはまる位置を見いだせない時はちんぷんかんぷんな状態となるが、通例はこの中間である。

それでも「葦編三絶」と言う言葉にあるように、繰り返すと分かった気になることもある。単なる内部での繰り返しが理解につながると言うことは、従来の情報理論ではありえないことである。人は理解すると、更に理解を深めようと脳空間内の位置やタグを相互に微調整した後に、更には感動、推測、決断と言った段階に進んでいく。これらの先の段階ではやはり、理解されたものに対応する脳空間内のマスやタグが相応した働きをすることになるが、これらの解明は今のところ将来課題である。

前回の「意味を理解する（その1）」では具体例として、①マスの拡張による理解例、②類似を同一と束ねる理解例、③蓋然推論による理解例、④モチーフの気付きに依る理解例の4例を挙げたが、いずれも「マスとタグ」で理解できることの具体例になっている。本日はこれ以降にもういくつか、理解の型を見て行く。

## 5、連続体のせめぎ合いの例

以前「つけ麺はラーメンか」と言う問いが話題になりました。これについてはその道の権威である新横浜ラーメン博物館が、肯定的な論文を発表しています。つまり、「麺を汁に浸すことは共通であるから、つけ麺はラーメンである」と言うことでした。この時点でラーメンと言う連続体はその守備範囲を拡張して、つけ麺をその配下もしくは内側に置いた訳です。では逆に「つけ麺はラーメンではない」あるいは「ラーメンはつけ麺の一種である」と言う命題はどうでしょう。

知恵とちょっとした詭弁を使えば、これらの命題も肯定的に証明できそうです。これは、蓋然論理に於いてはしばしば、「論述の肯定も否定も同時に真となる」と言うことがあり得ることを意味します。「肯定も否定も真」、これは古典論理（確定論理）ではあってはならないことでした。以前に「ゆっくり急げ」のように内部矛盾した言辞が蓋然論理の世界ではあり得ることを見ましたが、これをミクロ矛盾とするならば、今回の矛盾は「マクロ矛盾」とも呼ぶべきタイプの矛盾と言うことになります。

## 6、予備知識を要する理解の例

「田中耕一さんがアルツハイマーの特効薬を発見した」、この言辞は文法的には理解できるものの、この言辞を信じるかと聞かれるとにわかには信じられません。専門分野が違い過ぎるからです。でももし「田中耕一さんがアルツハイマー関連物質の微量分析法を発見した」と訂正があれば、この言辞を信じます。田中さんの専門分野だからです。このように理解には通例何らかの予備知識が必要になります。経験の伴わない座学も、この意味では価値があるでしょう。更に、賛成か反対か、面白いかつまらないか、あるいは信じるか否かと言った質問には、その前提として「叙述が理解できていること」があることが分かります。

## 7、理解に能力を要する例

物事には通常の常識を前提にしても、理解しやすいことと理解に相当の能力を要することがあります。つまり単純理解にも難易度がある訳です。これは当たり前にも聞こえるかもしれませんが、「なぜ理解に難易度があるのか」、これは別途問う価値のある素朴な疑問です。これへの回答は次回以降としますが、より難解な問題の種類として以前に、「抽象や構造を見出すことは理解が難しい」ことを見てきました。構造主義や抽象理解が非人間的で人を拒絶する傾向があるからです。それにも拘らず構造理解や抽象理解は人類智の増加にとって重要でした。

なぜ構造理解や抽象理解が難しいか、それはそれらの元になる具体例を脳空間内で表現している複数多数の連続体に「横串」を通す行為であり、それら連続体は横串を通される前は、その位置もタグもおおよそ無関係に存在しているために、一度それらの「整列化」と言うかなり強引な、脳空間上のダイナミックな組み換え行為を必要とするからです。そもそもそんな一見バラバラなものに横串を通す意味があると気付くことに、卓越した気付きを要します。ただしその努力は無駄に終わることはなく、新たに整列された連続体とタグはより見やすい、分かりやすいものに微調整されています。

（次回に続く）

## 2、趣味の瞑想の行く末

私は自称高等遊民で、だから会社員と違って奴隷ではなく貴族で、趣味は瞑想です。「趣味は競馬と宴会」でも別に良いのですが、私は瞑想をしたいので瞑想をしています。瞑想をしていると良いホルモンが出てきて、心が喜ぶのです。あくまでも趣味なので、つまり指示されてやる仕事ではないので、気が向いた時に気が向いたテーマをやって、ある程度まとまるとこうしてブログ記事にまとめている訳です。仕事でないと言

## 瞑想録（その5）

いながら結構気に入った趣味なので、最近を振り返るとほぼ毎日やっています。真夜中にひらめきがきて、わざわざ起きてメモルこともあります。

瞑想は思索ですから、あるいは読んでくれた人の参考になることも多少はあるのかもしれませんが、基本的に撮り鉄とか廃墟マニア等の趣味と何ら変わらないと思っています。楽しければ良くて、人と競おうとか、ましてやこれをネタに稼ごうとか有名になろうとか、そう言うことは全く考えていません。銭湯マニアとすら同じです。この趣味では核心の銭湯の内部の写真は取れずに心に収めるしかない、他人と共感するタグに乏しい自分の内にこもった喜びなのですが、それで良いと思っています。

私は現世主義者なので、「自分の死を見つめて、それに基づいて生の尊さを知る」などと言うことは全くありませんが、最近遺品整理に関する番組を見ました。専門業者によりますと遺品整理の原則は、「換金できない物はいくら故人の思い出があろうとも全部処分が原則」だそうです。まあそうでしょうね。本人は死んじゃっているし、今の時代はバカみたいに物を置くスペースもないし、取っておいても結局何も開かずに終わるだけなので、であるならば「遺影1枚以外すべて処分」、これは極めて合理的です。と言うことは、私が死んだあとは、私がウォーキングで撮った膨大な写真も、集めたウォークマップも、御朱印帳数十冊も、すべて処分されることになります。

「立つ鳥跡を濁さず」と言うか、これはむしろ当然のマナーです。今私がしている一連の瞑想の成果も、仕事としてならあるいは残すために学会誌に投稿するという保全処置もあるのですが、「仕事でない自由と、成果が処分されることは、抱き合わせ」だと考えています。だったら私は迷いなく、処分の方を選びます。「いつか消えると思えば言いたい放題が書ける」、そんな安心感もあります。私はアニミズムの者なので、「死んだら魂だけお山に帰る」、それだけです。

数年前まで大人気で、SNSの先駆けと言われたミクシー、今は廃墟同然で「まだあったのだ！」などと言われています。データとしては保存されているものの、もはやほとんど誰も顧みません。ミクシーが盛んだったころに、色々書いたり読んだり喜怒哀楽した人々の、そのエネルギーの総量は膨大だったのですが、その膨大なエネルギーと時間とは一体何だったのでしょうか。「面白かったからそれで良い」「時間つぶしになった」「成長の糧になって今も肥やしになっている」「もう忘れた」等々、人によって色々な意見が出ることでしょう。

実はもう70年も前に同じことを考えた人が居ました。英国の著名な歴史学者のトインビーです。彼は滅びた文明の遺跡を見て心を痛めました。「一体この文明で生きた人

は何のために生きたのだろうか」と。そして瞑想の結果、彼は結論しました。「これらの文明は滅んだが、結果としてその後の世界宗教や世界文明の発生の揺籃になった。だから価値があった」と。私はトインビー先生が好きだし評価しています。それは彼が人文科学に構造を持ちこんだパイオニアだからです。そして彼の結論にも一定の評価をしています。でも私はアニミズムの者なので、つまりトインビー先生から見れば最も未発達な文明に化石のように住む者なので、「役に立ったから価値があった」と言うキリスト教的価値観には直ちには賛成しかねます。

ミクシーの例に帰りましょう。私も一時ユーザーでした。もはやログインしなくなって何年も経ちますが、かつて私がユーザーとして使った時間と手間をどう捉えれば良いのでしょうか。第一に楽しかった。第二に今のツイッターとかブログの先駆けとしてその教訓は生きている。第三にまあ、良い思い出です。少なくとも無駄だったという感触はありませんが、「楽しかったから無駄でない」「思い出が増えたから無駄でない」が一番強い感触です。つまり「勉強になったからあるいはお陰で自分が進歩したから無駄でない」とは余り感じないのです。仮に勉強にも進歩にならなくてもミクシーは良い思い出を作ってくれて、そして歴史的使命を終えて廃墟になりました。

ではさらにこのミクシーの教訓をもとにして、遺品整理の観点から見た私の人生とは一体何でしょう。遺品整理の段階で私は廃墟になります。遺物もほとんどが捨てられ、やがて人々の心からも忘れ去られます。まあ生前は会社や社会でそれなりの役割をしましたが、そんなことには一つの感傷もありません。ウォーキングや御朱印帳や瞑想は楽しい思い出として、お山に持って行き、そこで永遠に生きます。永遠に生きると言うのがキリスト教的で語弊があるので言い換えますと、八百万（やおよろず）の神々やご先祖様と一緒に語り草にしています。そしてそれで十分なのです。だから、今は滅んだミケーネ文明の人たちも、ことさらに役立ちなど問われなくても、「楽しく暮らして今は彼らの極楽にいる」で良いのではないのでしょうか。

では、「もし全てが捨てられたなら、後世の歴史愛好家たちは現代を振り返るきっかけの文献が全滅してしまうのではないか」と言う心配はどうでしょう。文字通りに論理で考えるとそう言う困難を招来することになりますが、まあどこかで運良く残ったものを継ぎ合わせて、後世の人たちは平成時代を彼らなりに再現してくれるでしょう。そしてその「再現の喜び」は後世の人たちのものですから、その再現が実像と全くずれていたとしても、それはそれで御愛嬌であって誰も困らない、良いのです。

最後に、「あなたのやっている瞑想行為は、競馬や昼酒の人々に比べてどう違うのでしょうか」と聞かれたら、私の答えは決まっています。「全く異なりません」。すると更問が



あります。「ではあなたのやっていることは単なるエネルギーの浪費と環境汚染そしてマスターベーションではありませんか？」。そして私の答えはこうなります、「その通りそうですよ、でもそれが何か問題でもあるのでしょうか？」

### 3、暴論と暴談

世の中になぜ「暴論」があるのだろうか。筋が通っているからこそ論であると思われるところ、それが「暴」とはどういうことだろうか。これが今日の第1の素朴な疑問である。暴が先か論が先かと言えば、論が先である。そもそも論でないものに暴も順もありえないからだ。

「ごめんて済めば警察は要らない」、これは典型的な暴論だ。先ずこれは文法に違反しては居ないし一定の内容を持っている。だからこの叙述は少なくとも形式的には論だ。次に正論か暴論かだが、普通は「ごめんなさい」と言えば許すのが常識であるところ、許さないどころかあたかもちょっとよろめいてぶつかった程度で警察にまで言及し、「賠償金を払わないと今すぐ警察を呼ぶぞ」であるかのように凄んでいる。丁度、「立ち小便をしたら死刑にする」と言うのと似ている。だから事物の条理に反している、これは暴論だ。つまりこの例で見る暴論とは、形式に矛盾はないものの推論が強引なのである。

20年ほど前の朝の連続ドラマで、「ひらり」と言う番組があった。そしてその頃週刊誌に「天下の暴論」と題して、「ヒラリーは『ひらり』を見習え」と言う記事が載った。これが次の例である。誰かが誰かを見習う、これは論理的な叙述だから論だ。そしてでしゃばり気味のヒラリーが、真逆に下町っ子で相撲好きの「ひらりちゃん」を見習うのは、あるいはありかとも思うが、さすがに大統領夫人（当時）に「無名の小娘を見習え」と言うのは言い過ぎだろう。だから暴論になる。この例の暴論とは、意味も合っているが当てはめが不適切な場合である。

3番目の例として、「ユダヤ陰謀論」を挙げよう。題に明記されるように、これは一応「論」だ。しかし例えば、「日露戦争はユダヤ人の陰謀だ。ユダヤ人は日本にいくばくかの金をくれて戦争を仕掛けさせ、反ユダヤのロシア帝国を自らは血を流さずに弱体化させた」という主張はどうだろう。この主張がまかり通るならば、「世の中のあらゆる悪い出来事が全てユダヤの陰謀だ」と言うことになってしまう。いくら金持ちが多いユダヤ人とは言え、世界全部を取り仕切るほどの資金や人材や情報網があるとはおよそ思えない。だからこれも暴論なのだ。この暴論は一面的な推論による悪意の誘導だ。

以上まとめると暴論とは、形式上論になっているものの、意味上の当てはめが常軌を逸している、推論に無理がある、あるいは対象となる事物の特定の一面しか強調していないと言うものである。ただ、全くのウソやむちゃくちゃと言うよりは、一見まことしやかなのでうっかりするとだまされやすいように出来ている。つまりより悪質で、「論理の暴力」の典型例である。

次に素朴な疑問の2番目として、ここでは「暴談」と名付けたが、暴論とは逆に、理屈は全然繋がっていないのになぜか会話として成り立ってしまう状況を見てみよう。

第1の例は有名な話だが、「話せば分かる」に対して「問答無用」だ。戦前の文民首相の犬養毅が青年将校たちに暗殺された時のやりとりである。もし論を優先するなら、「話せば分かるだろう」の返事は「どうしてそう断言できるのですか」とか「それではあなたの見解から聞きましょう」とかだろう。だが将校たちの返事は「問答無用」で、まるで理屈にも論にもなっていない。青年将校たちはエリートだったから、まるで理屈が通じない無知蒙昧だった訳ではない。むしろ国を憂えるが余りの素直な感情の吐露が「問答無用」だったのだ。そして我々はこのやりとりを、理性を越えた所で理解できる証拠に、誰もがこの情景をリアルに描くことができる。この例からも人の間のやりとりは必ずしも常に理屈ではない、ことが分かる。

第2の例は老人と若者のバスの中での会話だ。「最近の若者は席を譲るマナーがなくてけしからん」に対して「爺さんこそ俺達から取り上げた年金で遊んでいるのだろう、金を返せ」と言う返事だ。全く理屈はつながっていないくて、それぞれが自分の立場を勝手に開陳させているだけなのだが、会話は理屈を越えて成り立っている。その証拠に、爺さんの一言がなければ若者の反論もありえなかった訳だ。理屈に応じた答えなら、「あなたはそれほどの老人には見えませんが」とか「すみません、私も体調が悪くて」とかだろうが、この例で分かるように、言葉による喧嘩は、論理の暴力よろしく、「相手の土俵に乗ったら既に負けている」なのだ。だから喧嘩で勝ちたかったら、むしろ理屈をことさらに無視するのが正攻法である。こう言うやり方はディベートの技法にもあって、オーム真理教の上祐幹部が良く使った。

第3の例は、「上司に指示されました」に対して「上司が死ねと言ったら死ぬのか」と言う恫喝である。会社員なら1度ならず経験していると思うが、極論を持ち出すことにより相手のあらゆる言い訳を封殺する、これはかなり手ごわい技法だ。つまり、本意は典型的な論理の暴力なのだが、「一見理屈に合っているように見えるところが返って

答えにくい」ことが計算されている。こういう暴論の返事には、さらに上で返すしかない。例えば居直って「はい死にます」とかだ。封殺には封殺を、これが技法のイロハだ。

例はほかにも色々あって、「さあ分かりません」とわざととぼけるとか、「重大に受け止めて善処します」を連発してその場をかわすとか、「分かりました」と答えて一切やらないとか、「厚さが1cmしかなくて不安全だ」に対して「ええ！1cmもあるじゃないですか」と混ぜ返すとかだ。人々の自然な会話を観察すると、実は半分以上のケースで、理屈がかみ合っていないまま会話として成り立っている。そして無視と無関心、真の無関心も装いとしての無関心もいずれも、しばしば論理を覆す最強の態度である。

最後に逆に、理屈に合い過ぎて居て返って臭い例を挙げる。「スモールデータも解析できない者がビッグデータを解析できる訳がない」という言辭が例だ。「小さいことに忠実な人は大きいことにも忠実だ」とか「基礎から段々応用へ」とかの言辭と一見似て見えるが、データ解析もそんなに単純なのだろうか。経験者なら体験があるが、ミクロやマクロレベルにはそれぞれに応じた手順があるところ、その中間のメゾレベルには適切な切り口がなくて返ってやりにくい。つまり困難さは単純増加ではない。だから今の言辭は、「分かりやす過ぎて返って怪しい」例である。イデオロギーや一神教の教義によくある形で、だまされない知恵と嗅覚を身につけて防御しないと、本当すぎて簡単にだまされる。

理屈が無用だとまでは言わないが、理屈に負けない護身術が必要だ。

#### 4、悟りについて

悟りとは仏教の、特に禅宗における究極の目標であって、一言で言えば開祖の釈迦と同じ、全宇宙と一体化した安寧の境地に至ることを言う。そしてその境地は「不立文字」（ふりゅうもんじ）と言われて、「悟り」と言う名前こそ付いているものの、「それを展開して言葉で説明しろ」と言われても無理なものである。歌の歌詞ではないが、「言葉にすれば、ウソに染まる」のだ。だからこの境地に行くには非連続的な飛躍、奈落の飛び越えが必要であり、しかもその飛躍はしばしば自力では不可能で、師と呼ばれる既得者の助けが必要であり、かつその教え方は説明ではなく比喩や矛盾や問答と言った、言わば間接的な、外堀から徐々に埋めていくがごとき体裁を取る。

「悟りに高低があるか」、あるいは「悟りには個人差や個性はあるか」、これらの質問に多くの覚者や研究者は「ある」と答えている。では、「高い悟りから見れば低い悟りは実は悟りと言えないのではないか」とか、あるいは「悟りが個人単位ならなぜ覚者



同士はお互いに理解し合えるのか」とった素朴な疑問は生ずるものの、まあ「悟り」を類似性のある「理解」に置き換えてみれば、ある程度は納得できる。

悟りの境地は、宇宙を貫くものであるから限りなく深遠で、それに至るには深い知恵と体験が必要だ。だから、「智恵のある人は何をすべきか」と言う問いに「悟りを目指しなさい」と言う答えはあり得るものの、他方で悟りは極めて普遍的であってかつ誰もが生まれつき仏性を持っているのであるから、誰にでも出来るようなものである。これらの形容は互いに矛盾して見えるが、悟りの本質とはそもそも矛盾している、少なくとも論理のような卑しいものではないから、当然のことだ。

悟りは一面極めて抽象的かつ超常的であるが、同時に極めて具体的かつ日常的である。この矛盾も悟りの特徴である。そもそも人の思いは矛盾だらけであるところ、その本質を汲みあげようと言うのだから、悟りはなおのこと濃厚に、当然に矛盾の塊である。一神教の教理とは逆に、理屈を言えば言うほど遠ざかる。

このような、多面の極致にある悟りであるから、師も弟子に、弟子の心の出来具合に応じて、臨機応変な「助言」を与える。当然のことながら同じ師の言葉とは思えない程、それらは互いに矛盾してくる。例えば瑩山禪師は弟子の峨山禪師が天台教学を極めた秀才であることに応じて、「月が2つある」と言う禪問答、つまり宿題を出した。これに対して峨山が2年をかけて得た答えは、「1つは釈迦そのもの、もう1つは自分の中にある釈迦」であって、これで峨山は印可された。他方で趙州禪師は、「悟りとは深遠な理屈だろう」と思い込んでいる弟子に「悟りとは？」と聞かれて、「朝飯は食ったか、そうしたら鉢を洗っておきなさい」と答えた。悟りは日常にもあることを教えるためである。

さて、この悟りだが、先にも述べたように文字が立たないことから、ログインが難しい。分かったつもりになっても、あれこれやっているうちにこんがらがって分からなくなってしまう、つまりフェードアウトしてしまうことが往々にしてあるのだ。特に「自分は悟った」という安心感が危ない。まあずれてきたら定期的に、今掲げた2つの両極端の「師の言葉」を思い出すと良いだろう。禪の深遠な部分と日常的な部分が、組み合わせでうまく表現されているからだ。

禪はインドの瞑想ヨガを起源として、中国で整理されて日本に伝来したが、日本で最も栄えた。だから禪(ZEN)は日本語がそのまま国際語である。この日本で栄えた理由に、日本人の持つアニミズムの心との相性の良さがあると、私は思う。お釈迦様の悟りとは基本的に、「病老死苦を脱するための執着しない心」であろうが、禪は特に自

## 瞑想録（その5）

然体を重視している。つまり、仏教も教えである以上イデオロギーが全く無いとは言えないが、禅は中でもイデオロギーを最も取り去って、「自分の中にある素直な心（生まれながらの仏性）を見よ」と説いている。

この「素直な生」がそのまま神道等アニミズムの「賢く美しい自然に生かされる心」に繋がっている。つまり、インドでのイデオロギーとしての諸行無常は、日本ではアニミズムの「もののあわれ」として受容し理解されたのだ。日本では仏教は、神道の土壌の上の接ぎ木として受容され、お陰で花開けたのである。更にその本質は中庸ないしは無為自然であって、老荘思想とも通底するのだ。

日本の仏教はそもそも、日本古来のアニミズムや神道の上に乗っかる形で、日本で発展した。釈迦の教えがそもそもある意味環境との調和であったところ、これがインドよりも温帯にある中国で整理準備され、そして日本の四季自然に入って美しく開花したということだ。だから日本で見える限り仏教は、「四季自然を味わう技術」と言う完成の仕方をしている。また、神仏習合や修験道の発展も可能であった。

ところで先に述べた悟りの「超抽象かつ同時に超具体」という特性、これ故に禅では、キリスト教の組織神学と正反対に、理屈や頭でっかちを大きく嫌い軽蔑する。実践を伴わずに万巻の仏典をマスターしても、悟りのダイナミック性の見地からは、ゴミ同然なのだ。この辺は学者という生き物の常套句である、「〇〇と言う報告もなされています」とか「その問題には既に解が示されています」と言った、変に先を競うような一種気取った態度や習性を、併せてバカにしていると言って良い。そんな薄っぺらなコピーの知識など、どうでも良いのだ。大切なのは瞑想と気付きだ。

仏教の境地に涅槃（ニルバーナ）と三昧（サマーディ）がある。どちらも悟りを得た究極の心持ちを表現しているのだが、涅槃とは全てが消え入った静寂で落ち着いた境地、他方三昧は逆にむしろ法悦の喜びの境地である。そして悟りに入った者のその悟りが本物ならば、この落ち着きと喜びと言う矛盾を、同時に持ち合わせかつ実感しているはずである。

キリスト教には「下らないほど偉い」とか「つまらないほど尊い」と言った雰囲気がある。これら自体はある意味逆転の発想であり矛盾なので、一見キリスト教が宗教的に見えるものの、その実装だけで精神性がなく表面的で、単にバカバカしくかつ下らないだけである。仏教では「仏に会ったら仏を切る」のだから、そのようなふやけた油断はみじんもないし、ましてや「愚かに会ったらひたすら無視」だ。無視と衆生救済は、表面上は逆説的に見えるが、むしろ全く合一している。こう言う「深いレベルでの合一」

こそが、本物である。なお、この確固とした心構えと無我の境地が、修験道と並ぶ世界最高の境地である、武士道に発展していった。

アニミズム神道の基本は、四季自然がこの上なく美しく、賢く、かつ謙虚であることを、身にしみて実感し感涙することである。そして少なくとも日本の禅と悟りは、その心に於いて一致している。

### 5、汝殺すことなかれ

以前「やり放し（やりっぱなし）の勧め」と言う記事で、「何でも最後までやり遂げないといけない」と言う現行の常識は厳しすぎて、トータル的には返って非生産になっていないか」という趣旨の問題提起をした。ちなみに当ブログは、問題提起を専らとして、その解の検証や証明はしないブログである。そしてその例として、やしきタカジンや赤瀬川源平、あるいは小松左京やマーガレット・ミッチェルの仕事の仕方を挙げた。

ただその彼らも、例えば原稿の締切日を守るとか、出演の時間にTV局に姿を現すとかは、ほぼきっちり守っていた訳であって、その意味で「何でもかんでもやり放し」と言う訳ではなかった。だからこの問題は、以前に提起した「どこまで深く知れば知ったことになるか」という問題と似ていて、「どこまできっちりやればやったことになるか」と言う、深さに対する態度表明の問題である。そしてその立場さえはっきりすれば、色々なレベルの「やり終えた」が有って良いことになる。

私自身は、対価を期待する仕事はともかく、この一連の「趣味の瞑想」については、「約2500字のブログ記事が書けるところまで」を一応の目安にしている。これは、「これより短いアイデアは、訴えるポイントの重さがまだ十分でなく、他方これより長すぎるアイデアはまだ十分な推敲ができて居ず、その適切なところが2500字」と言う経験則から来ている。そしてブログと言う形式上、ショートショートよりさらに短い、こう言う切り方ができる。

こう言う切り方をするには、実はもう一つの理由がある。私の一連の瞑想は、内容的に極めて仮説的である。蓋然論理で瞑想しているので、そもそも原理的に断定的あるいは結論的にならない。科学や学問とは、結論は常に確定的でなければならず、またひとたび認定されればもはや動かし難い物だ。もはや生气は失われている。つまり学問をするとは、「対象物を殺してとどめをさすこと」であり、一旦認定されてしまえばそれはもはや「死体」である。2度と息を吹き返さない。学術論文集や大学図書館は実際のところ、死体累々の大墓地に過ぎない。学問の世界に身を置く限り唯一の正しい

行いは、イスラム国よろしく「殺戮を重ねてとどめをさすこと」であり、殺せば殺すほど誉められる。ある意味空恐ろしい業界である。

「殺すことなかれ」、この言葉は聖書から引用した。キリスト教のプロテスタント（清教徒）には「聖書信仰」と言う信仰形態があり、これは聖書の離れた部分をただ理屈のみでつなぎ合わせて「理解した」と称する、精神性皆無の言わばパリサイ的な聖書固定技術なのだが、これなんかもまさに「聖書を殺す作業」である。

これに対して私が提案している蓋然論的瞑想は、結果が正しさでなく面白さ（interesting）で評価されるものである。蓋然論理の程度の高低は、そこに込められている智慧の深さで測られる。つまり瞑想とは学問とは異なって、「つまらない事実よりも面白い妄想の方が尊い」と言う世界である。一見無駄に見えるかもしれないが、よっぽど人間的な行為である。だから仮に瞑想の結論が間違っていることが何らかの手続きで証明されたとしても、それを理由に直ちに棄却して殺さないで欲しい。殺すのではなくて瞑想の真の中身、つまり知恵の本質をこそ拾い生かして欲しいのだ。

死んだ物にはもはや命はない。だから真に真実を求める求道者は、書や大学の講義の中にではなく日常の素朴な疑問にひたすら耳を傾ける。天才の寺山修司が「書を捨てよ、町に出よう」と呼びかけたのも、真実は墓の中にあるのではなく、生きた現実の中にあると言う悟りだ。不肖私も、この気持でウォーキングやフェスタ巡り、展示会巡りなどを行っている。もちろん箔などは何も付かないが。

ある手続きで結論が誤謬であったとしても、それは「もしこの手続きに乗るテーマならば」と言う暗黙の前提が有ってのことである。その意味で物事の真偽は常に相対的である。もしその瞑想に智慧があるならば、その知恵を拾い生かす何らかの手続きがある筈である。それ故に人知の異次元での興隆のためにも「汝殺すなかれ」、これを肝に銘じて頂きたい。蓋然的瞑想の最大の価値は、結論そのものでなく問題提起にある、生きた問題の提起こそが知恵であり、人類の知的資産の最も偉大なものののだ。

例えば錬金術、これが技術として誤謬であることは、現代の核物理で十分に証明されている。そしてそれを理由に一時忘れられた。ところが最近、錬金術を科学技術ではなく哲学として見直そうという機運が高まり、あたかもベーダやアベスタと言った宗教の古典が尊重されているように、錬金術哲学もその思想の重さが認識されるに至っている。これなど良い例だろう。「絶対に正しい代わりに当たり前」の科学として文字通り墓に入れられるよりも、哲学あるいは思想として生かされる方が、どれだけその価値

が高揚することだろう。科学技術は望遠レンズと同じく単なる拡大鏡であり、道具であるからバカチョンであり、愚かな程に「バカチョンで有れば有るほど役に立つ」のだ。

この錬金術の例をもとにすると、次のことが言える。「実験事実と合わない」という理由で過去に棄却された多くの仮説、つまり既に不名誉に殺され終わった仮説の中の、その墓を掘り起こしてみよう。すると、「実験結果と符合して言わば名誉的に確定された真実」よりも不名誉に野たれ死んだ仮説の方が、その導出に用いられた智恵は遥かに深いと言うことがいくらでもあり得るわけだ。だったらこれらについても、適切な形と手続きで名誉回復してやるのが、人類の知恵の集積によつぽど寄与する。再度繰り返すが、「汝殺すことなかれ」、これは鉄則だ。

赤瀬川源平さんは街に残った無用の残存物に芸術の枠を越えた芸術性を見出し、これを「トマソン」と名付けて積極的に観察して回った。彼の言う「超芸術」の始まりだ。だったら棄却されたが知恵ある仮説や科学的根拠が十分でない瞑想や妄想、これらだって言わば「科学的トマソン」であり、もちろん全部ではないものの、かなりの知恵が「面白い」と言うキーワードで拾われて良いだろう。

そして私がしばしば奨励している「高等遊民」、昔は鴨長明や伊藤若冲、より最近だと大島桂月、現存だとネジメ正一さんや西村賢太さん、こう言った人たちは同じ言い方をすれば「人間トマソン」と呼べる。彼らに象徴的に「無用の用」の重要さがある。そしてこの「人間トマソン」の層の厚いことの大切さがある。新しい文化や芸術はエリート会社員からでなく、専ら彼らトマソンから出る。そして1人のトマソンを生かすのは、100人の「無用」を養って初めてできることだ。生活保護もこのための「捨て金」としての価値を持つ。「どんな事物もあふれるほど贅沢な無駄の上に成り立つ」、つまり贅沢は味方だ。だからある物が仮にどれほど無駄に見えたとしても、「汝殺すことなかれ」なのだ。

## 6、妄想が人を造る

先日人工知能に関する記事で、「人工知能は事前に与えられたルール群の内側でしか行為ができない」ことを指摘して、「自律的に人類殲滅を企図し遂行することはできない」と結論した。ではなぜ人類は、既得の経験以上の判断や行為や決断ができるのであろうか。結論から言うならばこれは、人の心はアナログ連続体（マスや塊として物を見る）思考であり、機械や人工知能はデジタル点集合思考だからである。連続体集合論は点集合論に比べて、①広がりがある、②相互作用がある、③順序がある、の3点に於いて、より一般的かつ現実的な、物の見方である。



また先に、人における理解の本質を、対象となる事物を多面的多重的に見るために無数の「タグ付け」ができて、「これらのタグを既存の脳空間内に、他の連続体のタグとの関係で適切に位置付ける作業が理解である」と説明した。つまり人の場合理解の段階で既に連続体的であり、これ故に既定のルールからはみ出る要素があっても理解できることを見た。

人が理解する一番の目的は何らかの決断をすることであるが、理解から意思決定に至るにはその間に、推測と言う過程が必要になる。ここで言う推測とは古典論理学における確定推論の、「 $A \rightarrow B$ ,  $B \rightarrow C \Rightarrow A \rightarrow C$ 」のような人工知能でも出来る自明な論理推論ではなくて、「普通は」「常識的には」「近い所では」「経験に基づけば」と言ったような、オン・オフだけでなく「感じ」や「相対的な遠近」や「常識」等の入った蓋然推論になるのだが、これは広がりをもつ「連続体」の視点に於いて初めて可能である。

ところでこの蓋然推論過程だが、基本的にタグを通した連想過程である。人は普段、特に目的がなくても言わば自然な感想として、理解に直ちに引き続いて色んな素朴な思いが心に浮かんでくる。例えば「冷や奴」を理解したとして、この理解に言わば連動して、例えば「冷たそうだ」「白くて旨そうだ」「醤油をかけようか」「湯豆腐と迷うな」「あの子を呼び出そうか」「熱燗で行こう」等々、特段命令されなくても色々な思いが浮かんでくる。これらは言わば雑念であり、更に言えば妄想と言っても良い。一見無駄な思いであるが、物を広がりのある塊として見るからこそ、こういうルールからはみ出た外向きの、知恵や気づきを含んだ思いができるのだ。

一般に雑念とか妄想は「良くない」あるいは「余分な」、場合によっては「邪悪な」「病的な」と言った音感を持つ。だが人工知能は、雑念や妄想ができないからバカなのである。また科学や学問は、研究途上ではとにかく少なくともその仕上がりの発表の段階では、雑念や妄想をあとかたもなく取り払わないといけないというマナーがある。実は、だからつまらないのであるが。

雑念や妄想・・・、楽しいではないか。これらは文学や芸術の源でもあるし、現実では不可能なことも妄想では可能になってくる。禅は精神統一の優れた技法であるが、座禅の際に「雑念を押し殺せ」とは指導されない。「雑念を解き放ち流し去って、これに捕らわれないように留意せよ」と指導される。またウィキペディアによると、妄想は多分に病的な行為であって精神病患者によく表れるとあるが、軽くて健全な妄想はむしろ人間らしいではないか。

人の思考は人工知能のように杓子定規でなく、極めて柔軟性が高いので、面白い話には笑い、嫌なことは避けようとする。面白いとか、自分は嫌だとか、人はこう言った感情のお陰で危険を避けて幸せや喜びをつかめるのであるから、雑念や妄想はまさに人の防衛本能や自己保存本能の直接の発露であると言える。雑念や妄想のほとんどは無駄に流れ去るが、無駄なことは悪ではない。むしろ「無用の用」であり、贅沢にあるからこそ異次元の気付きに至れるのだ。無駄のない人生ほど余裕のない、つまらない物はない。

さて、「理解→推測→決断」の思考手順に、もう少し迫ってみよう。推測段階の最初の過程は、可能な選択肢の列挙である。ある目標に対して、その目標に到達できる複数の選択肢を、その理解にかかる連続体の無数のタグの中から選び上げる作業である。その次の段階として、選ばれた選択肢について、もしその選択肢に依るならばどういった喜びと利得がありえて、又そのためにどれほどの努力を要するかを推測する作業に進む。そしてこの段階こそが、試行錯誤と言う雑念や妄想が、フル回転する段階である。これらの作業が終わると、推測結果相互を利得の物差しで比較して、一番に評価の高い行為を選択決断する訳だ。

以上、人が柔軟に物事をさばく過程を見てきた。そのキーポイントは始めから終わりまで、幅のある連続体であった。そして人工知能が意思を持たないのは、この幅の無さによる融通の無さであることが見えてきた。冒頭で、連続体には相互作用があることを指摘したが、人は脳空間に分布する多数の連続体間をあるいは内外を、決して一律ではなくむしろスムーズに、グラデーションとして、分布や傾きをもって連続的に認識する。この補間作業は多分に個人的なものであるので、そこに人による個性や好みや嗜好と言った主観が入る余地がある。好みや嗜好や主観は即ち再現性の無さでもあるが、再現性がないからこそ人生は面白い。

以前やはり、文学や芸術の面白さは、更には数理科学に特有の壮大な理論さえも、全ては「科学と言う死んだ堅物を取り去った隙間によって可能化するファンタジーだ」と説明した。そしてこのファンタジー、これも雑念や妄想と近い関係にある。つまり世の中の良い物や創造的な物の多くは、実は雑念と妄想が起源であるのだ。このような雑念や妄想が自発的に起こる理由はおそらく、脳のシナプスとニューロンが自発的に結合と乖離を繰り返しているからであろう。だからこそ、気分転換をして頭の集中を解いた時にこそ、異次元のアイデアが浮かぶのであろう。この詳細は「脳科学」と言う一種の拡大鏡が、ツールとしての進化を遂げれば、もっと見えてくることだろう。

科学は辞書や道具として使い倒す物だから、正確でありさえすれば良い。優れた科学者とは、腕の良いレンズ磨きの職人である。職人でなく貴族になりたかったら、もっと妄想をしよう。

## 7、美と感動の構造

「なぜ人には人工知能と異なって智恵と気付きと判断があるのか」、この機構の根源に「物を塊で見る（点でなくマスで見る）」と言う固有の能力があることは、既に見ました。本日は、「何のために人は事物を理解し判断するのか」を見ようと思います。マクロ効率主義の観点からは、人の生存や自己保存のために無用な能力が、徒（いたずら）に基本能力として備わっているとは考えにくいからです。

日々人は、「あの一言はどんな意図があったのか」とか、「どの仕事を先にやろうか」とか、色々の「理解→想像→判断」のサイクルを、多分に無意識のうちに繰り返しています。これらは一見、最低限に生存する以上の余剰な能力で、無用なことを過剰の余裕でやっているように見えますが、実は自己保存や自己防衛本能の発露です。一番本来的な「理解→想像→判断」のサイクルの用途は、リスク回避と衣食住の調達です。「このまま行ったら危ない」とか「指示されたとおりにバカ正直にやると返って罠にはめられる」とかを、如何にそのかすかな予兆のうちから鋭くかぎ分けて、最小限の労力でこれを回避できるかで、その人の寿命と運命が決まります。ですから生き延びのために、判断以上に重要な作業はありません。

そして人固有の優れた能力が、実は生物として最も基本的な本能からの発露であると言うことは、これは統一理論的にも納得できることです。ただ、今の世の中ではそこまでのリスクはありません。ですからその能力をもっと次元の高い、生活の彩りと言った方面に、言わば流用しているのが私たち人類の日常と言う訳です。智恵、気付き、勘、直観等アナログな物すべては、自己保存の本能からの直接の発露です。裏から言えば、本来的に自己保存を予定しない人工知能に、気付きや直観はあり得ません。

それでは理解よりももっと人らしい感情である、美や感動はどうでしょう。美や感動がなくても、人は自己防衛に何らの遜色も生じません。ということは人固有の重要な才能の内いくつかは、本能に遡らない純粋に後天的な教育の結果なののでしょうか。ということは教育次第で「ヘドロも美しい」とか思えてきちゃうのでしょうか。人工知能にそう言うルールを与えればそれは可能ですが、人がヘドロを好きになるとはおよそ思えません。ということは美や感動も何らかの本能に根ざしていると考えられます。

先にも見たように、「楽をして仕事を片付けたい」とか「美味しい物を食べたい」とかも、1段階高くなっているようですが自己保存本能の発露でした。それと同様に、美や感動も実は自己保存本能の更に昇華した結果だと考えられます。単に「危険がない」よりも「楽しい」とか「美しい」とかは、人にとって更に高く安全なのです。「理解できる」よりも「感動した」の方が、より人にとって危害の無い、安らいで良い、これ以上の安全はない最高の状態だと言うことです。ちなみに美に、「感動した」はあっても「納得した」はありません。

アニミズムに生きる我々日本人は、移り行く四季自然に感動して感涙します。なぜ感動するのか、それは四季の移り変わりの一々の美しさもさることながら、それらの「物言わぬ謙譲で賢いところが自分たちをこの上なく守ってくれている」と言うことに確信を感じるからでしょう。まさに美と感動の世界です。この至上の美と感動の世界に、汚れたイデオロギーなど入る隙もありません。

ところで私は誰にも増して、押し付けと強制が大嫌いな人間です。誰よりも自由を愛しています。多様な選択肢とこれを選ぶ自由の希求、これも実は自己防衛本能の発露であって、万人に共通でありかつ基本的な項目であると考えます。今までの人生を振り返ってみて、最も肥やしにならなかったのが大学と学問、次にダメだったのが会社と仕事であり、逆に人格形成の肥やしになったのはウォーキングとかフェスタ巡りとか作陶と言った自主的な活動でした。

だから、定年間際ほど年寄のおじさんが、「親の指示だから」などと唯々諾々になっているのを、特に日本では周りでよく見かけけるのですが、「こいつらいつまで自立がないのだ、親と言っても所詮は別人格だろう、責任を取ってくれる訳じゃあないだろう」と、ついイラついたりします。その私がアニミズムを好きになるのは自然としても、忠臣蔵を何度見ても感動するのはどうしてでしょう。また、先の大戦で命を落とした英霊たちに崇敬の念が浮かぶのはなぜでしょう。

忠臣蔵と言えばバリバリに封建主義、封建主義は滅私奉公で自由は少ない、しかも忠臣蔵では四十七士は生前から決められていた上司のために、自由を放棄して辛苦をなめた上で集団としての目標は達成しましたが、全員が切腹になっています。大戦の英霊たちも、それこそ会社以上に規律のきつい軍隊と言う社会で、自己生存のための選択の余地などほとんどありませんでした。私が「同じことをやれ」と言われたら、まず反発するでしょう。日本の特に田舎特有の、世間体至上主義や家中心主義を、

私は反吐が出るほど嫌いです。でもなぜか、忠臣蔵や英霊たちのその心に美を見出して感動してしまうのです。自己矛盾も良いところです。

私はここに、一言で自己防衛とは言いながら、ミクロの自己防衛とマクロの言わば種としての自己防衛の、2種類があるのを見ます。生物レベルでも例えばサバンナなどで、個体を犠牲にして集団を生かすことは良く見ます。つまりミクロのアポードシスがマクロでは種の保存になっているのは良くあることなのです。そしてこの時自ら犠牲となる個体は、ミクロ的には矛盾ですが、私には到底到達できない無我の境地であるからこそ、返って尊敬し、かつその心に感情移入するということではないでしょうか。

そして死によって「山に帰る」、この生きざまはアニミズムの心をも体現しています。アニミズムの究極とは自然との一体化です。山水画では人工物の家や橋や舟が自然と溶け合っていますが、あたかもあんな感じですか。もっともこの感動にも中庸は必要で、余りに行きすぎると三島由紀夫の「滅びの美学」や、更にはカルトが要求する「自己犠牲」にまで、至ってしまいます。

ちなみにカルトと宗教の境界線、かなりきわどいのですが、私は「個人の救済か集団の存続か」という究極的な排他的二者択一に於いて、個人の救済を選ぶのが宗教で、集団の存続を選ぶのがカルトであると理解しています。これまでに経済、歴史、集合論等様々なところで例示してきた「ミクロ vs. マクロ」の問題、どちらを優先すべきか、これは簡単に優劣を付けられるものではありません。

美と感動、これらは本能に基づきながらも同時に最も昇華している、おそらく人には出来て人工知能にはできない最たるものでしょう。美や感動の無い「音痴な」人、こう言う人は、ほとんど人工知能レベルに情緒未発達な人だと言えます。

## 8、中庸とアナログ計算機

先日議論したように、人に出来て人工知能やデジタル計算機に出来ない物として、知恵、気付き、勘、直観、自我、感情、美、感動等がある。言い換えればこれらが人を、真の人間にしている訳だ。そしてこれらはいずれも人のあるいは種としての、防衛保存本能の何らかの発露であると見なせることも見た。今日はこれらに加えて、やはり人工知能にはできないこととして、融通、適当、非厳密、そして忘却を挙げたい。これらは一見能力の欠陥に見えるが、赤瀬川さんの言う「老人力」の意味でなくて、つまり言葉のトリックでなくて、本当にポジティブな能力だ。つまり、バカチョンの機械には出



来ないことができるのだから、「真の能力だ」と言えるのだ。そしてこれらの能力は全て、事物を点でなく連続体（マス）で観ずるからこそ可能な、能力である。

ところでこれらの融通から忘却までの便利な能力が、「人なのになにできない」と言う業界がある。即ち、キリスト教を代表とする一神教の世界、共産主義の世界、及び学問の世界である。そこではイデオロギーの忘却も変更も許されなくて、永続性が全てなのだ。なぜこれらの業界ではこういう便利で無碍なことが禁止されているのか。それは一言で言って、「中庸」ということを知らないからだ。中庸を知っていれば「この程度は忘れても良いや」などと言うさじ加減が可能になる。

融通から忘却まで、これらは「オンかオフのどちらか」と言うような絶対的なものではなく、むしろ「遠い・近い」と言った感じの相対的なもの、従って人により場合により意味の取り方が違うものである。だから中庸という常識的な歯止めがない業界では、「程ほど」がないので、どこまででもやり放題で收拾がつかなくなってしまう。だからこれらの、一神教的な硬直した業界では、異端審問を厳しくして常に外れていないかを確認しないと、気が済まなくなるのだ。不幸な業界である。一神教や学問は将来、デジタル計算機に置き換えられ得る。

この中庸、日本人は四季自然の移り変わり等から自然と体得している。暑い日もあれば寒い日もあり、大収穫の年もあれば飢饉気味の年もあるけれど、そうそう外れることはなくて、ほぼ守られていて年年歳歳繰り返すと言う実感から来ている。そしてこの中庸こそが、「世の中は中庸が一番安全だ」という、やはり防衛保存本能から直接に派生した能力であると見ることもできる。そう見ることができるなら、中庸理解は人の生来の性格に本来的であって、「一神教や学界の人たちの方が本来の能力をイデオロギーによって不当に圧殺しているのだ」と見ることもできる。

かつて工学系の技術者と話をした時のことである。彼の分野では「行列のある列の和が1になるような行列が重要だ」と表明した。そこで私は、「そういう行列は群を成さない（演算の結果がもはや同様の性格を持たないので、続かない）」と指摘したところ、その技術者は「だったら演算ごとに列の和を1に規格化すれば良いだけのことだろう」と答えた。その時私は「工学者と言うのは随分乱暴な人種だ」と思った。だが今思い返してみると、こう言った工学者のやり方こそが、数学や人工知能の内向きの限界を打ち破る、融通無碍な手法であると思うようになった。私は物造りには興味はないが、物造りのためなら非厳密も何でもありの工学の方が現場に近いだけ、理学よりも新機軸を提案できる懐の深さがあると、今は感じている。

さて、以上総合すると、高々優秀な手足に過ぎないデジタル計算機や人工知能に「応用動作」と言う高い能力を付加するには、気付きはもちろんのこと「中庸も実装できる回路や素子が望ましい」と言うことになる。そう言う回路が形成できれば、おそらく意味理解も可能になるだろう。このようなアナログ計算機が具体的にどういう形になるのか、今のデジタル計算機とはかなり異なってくるだろうものの、その具体的な姿は残念ながらまだ浮かばない。

一つ予想できることは、意味理解とか中庸とか気付きと言うものが、たとえ計算機に融通機能を付加できたとしても、多分に個別具体的であることから、アナログ計算機はデジタル計算機のように「ルールさえ注入すればどの機械でも同じパフォーマンス」と言うことはなくて、むしろ一機一機手間暇をかけて、個々の機械に経験させ教育を施すと言った種類の物になるだろうと言うことだ。大量生産に向かない装置なのだ。したがって機械ごとに癖を持つだろう。優秀な機械とか、融通のある機械とか、よく訓練された機械とか、特定の分野に強い機械とか、あるいは優秀な人の脳を電子移植した機械とか言う感じだ。

そうなってくると、アナログ計算機には個別に、その特技や癖や系列を明記した血統書が付き、血統ごとに価格が違ってくると言う、あたかも競馬馬のような世界を形成すると見える。ここで血統とは馬の場合ならその父と母の名前とか育った厩舎や飼育人の名前だが、計算機では「著名なマシンの途中経過までをそのまま移植して更に相当の訓練を施して個性化した」と言うような情報の記述になる。だからまるで馬と同じではなくて、基本機能の移植から始まってどういう学習と経験をさせたかを列記することになる。しかもやはり馬と違って、中枢でない部品は取り換えが効くことになる。

さてどうだろう。先日「デジタル計算機上の人工知能は自我を持たないから自発的に人類殲滅を企図することはない」と結論したが、今説明したような「血統書つきアナログ人工知能」の場合は、どうやら自我を持てそうだから、もしかすると人類殲滅も企図するかもしれないではないか。だとしたらどうしたら良いだろう。こんな時こそ、応用倫理学の出番だ。

応用倫理学は、数学以上に実益がない哲学の応用系で、例えば企業倫理(コンプライアンス)等においてわずかな応用、つまり現実社会との接点を有しているが、今後は科学技術の発展に伴って、「できるけれどもやらない」と言う形の人類大での合意形成に、必須の分野となっていくだろう。例えば無意味な終末医療は、出来るけれども辞めて「尊厳死を認めよう」とか、素粒子物理加速器は技術的には作れるけれどもけた外れに膨大な費用が必要なので、敢えて「学問の進展を見送っても辞めよう」と

か、そういう形の合意形成だ。これらの項目と同様に、「アナログ人工知能は作れるけれども真に人類の脅威になるので作らない（あるいは敢えて作る）」という合意形成も、早晚必要になってくるかもしれない。

## 9、デジアナ習合

これまでしばしばデジタルとアナログについて議論してきた。デジタルは点で、完全論理（古典論理、形式論理）が適用され、点集合論（要素と集合に階層あり）をモデルとし、欧米キリスト教文明の申し子である。他方アナログは連続体（幅のあるマス）で、蓋然論理（智恵や勘）が適用され、連続体集合論（階層なし）をモデルとし、東洋アニミズムの申し子であるというまとめになる。要するにデジタルとアナログは、何から何まで正反対になるのだ。そしてデジタルにかかる理論は科学技術として十分に発達しているから、21世紀はその行きすぎたデジタルへのカウンターバランスとして、アナログが見直されるべきだとの主張をしてきた。

しかしながら日々の行動や判断を詳らか（つまびらか）に見ていると、どうも「この場合はアナログ、その場合はデジタル」などと排他的に使い分けているのではなくて、むしろほとんどの場合、その調合割合は色々あるものの、多かれ少なかれ両者を同時に混ぜこぜに、融合して使っているように見える。以前に挙げた例だが、どこかのレストランで昼飯を取ろうとすると、人はサンプルを目でビジュアルに見ながら、同時に値段もデジタルに考慮し、これらを別々でなく混ぜこぜにして決断しているのではないか。絵画を鑑賞する時も、その絵をビジュアルに見つつも、同時にその作者の人生や時代背景の説明を論理的に理解しながら、人は総合的に鑑賞している。

現実はどうも一から万事このようで、デジタルとアナログは一見するほどに排他的でない。これは、「理解と言う行為がそもそも自己防衛保存本能の現れである」という観点からは、むしろ自然だ。アナログは漏らさないが理解に容量と時間がかかる。デジタルは瞬時だが硬直している。どっちもどっちだ。じっくり考えないと理解できない新規事象に遭遇することもあるが、瞬時にほぼ論理的に回避しないと命が危ないこともある。だから両者の適切な混合はまさに人の生きる知恵、自己保存本能の自然な発露である。

とすると、「アナログは連続体、デジタルは点集合」という描像はどうなるのだろう。本能のレベルではデジアナは習合を通り越して融合しているが、基礎論的視点（集合と論理の視点）においてはこれらをどのように習合あるいは融合できるのであろうか。今までに見てきた連続体論（多面的、多重的、相互作用）に根本的な見直しが迫られ

るのであろうか。「連続体は特定の点で切れない」が基本であり、これを譲ると結局デジタル論の応用物になり下がってしまうので、譲る余地がないように見える。

この問題を回避する、正しいかどうかは別として手っ取り早い理解は、「デジタルはアナログの極限である」とする収め方である。丁度関数の極限として微分が出てきたように、「連続体の幅が小さくなって潰れた極限がデジタルだ」と言う見方である。でもこれだと、デジタルはアナログのごく特殊な場合であって、その存在はアナログと対等にならないのではないか。これは見方の問題であって、解析学に於いても「元の関数と導関数は独立同等である証拠に、導関数を積分すると元の関数になると言う、言わば陰陽の対等な関係になっている」と見ることもできる。

なお、上記した極限を取って連続体を点に潰した時に、連続体の持つ、多面性、多重性、相互作用は、点の「永遠に何もない」という性格上、全て消滅するのみならず、以前に「メビウスの帯をはめ込んだ球面」で議論したように、位相も変化して言わば全く別物になる。従来の解析学でこのようなことが起こらなかったのは、あくまでも数直線上での極限と言う、言わばきれいな世界での極限だったからである。複素正則になるとコーシー・リーマンの関係式と言う非自明な条件が加わってくるが、この更に進んだ先に、連続体の極限取りはある。だから当然に、「矛盾表現」が許される余地もない。

もう一つ、「デジタルがアナログの極限だ」とすると直ちに理解できないのが、点集合論の「要素と集合」と言う階層付けである。アナログを1点に潰しても階層は出てこない。これについては、現行の集合論は階層構造を取っているが、これは必然ではないと答えておこう。階層構造を噛ませた方が、構成が立体的になって、数学理論の構築と言うファンタジーを入れ込む余地が広がって、より功利的かつ多産的になるだけの話である。

例として「弾性体」を挙げる。弾性体はバネ、ゴム、スポンジからなる。だから集合論的には、弾性体＝{バネ、ゴム、スポンジ}である。そして弾性体はバネ等よりも上位概念だから、この記法は概念の上位下位もついでに正しく表示していることになる。だが、物事は全て、このような階層構造にはめ込まれているのであろうか。例えば小説とそのモチーフ、モチーフの方がエッセンスを取りだしてはいるが、だから上位と言うことも下位と言うこともない。あるいはアニミズムの我々を取り囲む自然、具体的には山とか川とか滝とかが、自然の一部ではあるが、「自然の下位概念」とは認識しない。

これらから見るように、概念の上位下位の階層は、あると思えばあるが必然ではなく、むしろ一神教特有の、「神を最上位に置いて全てを順序付けたい」と言う、一神教に



特に目立った、物の見方の一つの願望に過ぎない。先の弾性体にしてもことさらに階層を強調せずに、「弾性体＝バネ＋ゴム＋スポンジ」だって良いのだ。むしろ「ゴムでできたバネ」のような中間物の存在を考えれば、今記した階層なしの「連続体の和」の方が自然であり、階層化はバネ等の個々の構成要素を概念化（点に）してしまっていると言う意味で、要素レベルで既にデジタルなのだ。一神教はイデオロギーの塊だから点にするのが好きであり、そして東洋アニミズムや仏教の連続体的視点は、「その概念化こそが不幸や執着の源だ」と説いている。

最後にこのデジアナ習合であるが、習合なのであろうか、それとも一如なのであろうか。習合とは異なる物が融合せずに併存していることであり、一如とは正反対の物が実は同一であると言う悟りを意味する。だから習合と一如は反対語でもないし背反もしていない。だから先ほどから「デジアナ習合」と言っているが、「デジアナー一如」とも言えるのだ。一如の場合は融合すらしている。梵我一如と同様にデジアナも一如である。デジとアナと言う反対の物が実は近い、あるいはこれらの区別を越えた所に本当に深い真理があるということだ。数学基礎論的定式化はまだできていないが。

## 10、宗俗習合とイスラム

先日、イスラム過激派による、フランスの風刺週刊誌社の襲撃事件があった。これについては、表現の自由を強調する欧米側と、宗教の尊重を求めるイスラム側の、深刻な対立に発展している。しかも最近イスラムでは、イスラム国の強引な「独立」や、パキスタンの過激派による学校襲撃、さらには未成年を使った自爆テロ等が重なって、非イスラム国の間では「イスラム＝狂気の宗教」と言う図式が出来上がっている。

ところがイスラム諸国にステイしたことのある日本人、特に田舎にステイの経験のある人々は口をそろえてイスラム人を、「のんびりとして気が良く人懐こい友人」と表現している。この描像とジハードに血道を上げるイスラム人、彼らをまとめて一体どう考えたらよいのであろうか。私はイスラムに詳しくはないが、たしかにイスラムには、キリスト教より後に誕生したとは思えない、原始的な要素が散見できる。男女の差別、結婚式すら新郎と新婦が同席しない。ブルカやヒジャブの強制、これには「女性は誘惑する悪魔」との見解が透けて見える。さらに「個人の自由」の欠如、名誉殺人が普通に横行しているし、耐えるドラマの「おしん」が共感を呼んでいる。

私は多神教の人間なので、イデオロギーに終始する一神教には、つまり交通安全の標語のようなものに身も心も捧げて心酔する気持ちは、全く同感も理解もできないが、一神教の人々は「全世界を造り治める偉大な神様の懷に抱かれる安心感」だと信仰



告白しているので、そう言うことなのだろう。イスラムの神であるアッラー（旧約聖書のエルに当たる）は、「始まりも終わりもない、世界創造の前からあり世界の終りの後もある」のだから、下手に擬人化されていなくて抽象的な分だけ思い入れる余地があって、さも崇高に見えるのだろう。

さらにクルアーン（コーラン、イスラム教の聖典）ではしきりに、「義人は天国で沢山の美しいフーリー（美女天使）に囲まれて優雅な生活ができる」などと、「御利益」がしきりに強調されている。こう言う天国の快樂的な描き方は、変に禁欲的なキリスト教とは、同じ一神教でかつキリスト教の欠点を学習の上で成立したとする割には、時代に逆行しているような異なった要因だ。おそらくイスラム以前の現地の原始宗教を、うっかり取り入れているのだろう。

また、イスラム教に於いてイーサー（イエス）さんは、決して否定されているのではなく、最後にして最大の予言者であるムハンマド（マホメット）に次ぐ地位を与えられている。つまりキリスト教のイエスさんに関する部分は、希釈されながらもイスラムに引き継がれていて、かつ後発の宗教の分だけより合理的に、つまりムハンマドが気に入った部分、例えば自己犠牲とか絶対帰依とか、そう言った宗教技術の部分をことさらに強調して出来上がっているように見える。

さて、なぜイスラムには欧米キリスト教国のような、個人の自由と平等とか基本的人権と言った観念が希薄なのであろうか。つらつら考えるに、宗教と言うものは多かれ少なかれ守旧であって、神のためには個人の自由など保証されない方が普通なのであるから、この素朴な問いはむしろ、「なぜキリスト教には自由があるのか」と問うべきであろう。これにはイスラムに引き継がれなかったキリスト教固有の事情がある。

キリスト教に於いても、自由が強調されるようになったのは宗教改革以降である。それ以前のキリスト教は、今見えているイスラムとさほど変わらなかった。十字軍など狂気と独善以外の何物でもないし、中世暗黒時代には身分制度はあっても個人の自由などなかった。そしてカトリックの僧職は身分の高い所に居て、絶対専制君主とともに民衆を収奪していた。

これを「聖書の教えと異なる」として、宗教改革は言わば素朴な疑問から始まったのだが、その改革とは一言で言えば、既存の権威の否定であった。ローマ教皇の権威を否定し、聖母マリアを否定し、聖人信仰を否定しと、全てを否定して残った物は、結局書き物としての聖書である。そして新教では、顕教としての聖書のみをカノンとしたが、これは実態的には教祖の「イエス還り」ではなくて、解釈権を掌握した人物の「パウロ

還り」であった。そして奇跡能力皆無の人間パウロに戻るとは、キリスト教が神秘や精神修養と言った宗教の要素がまるでない、ただの道德と勤勉になるということだった。三位一体のイエスに戻るのではなく人間である使徒パウロに戻った時点で、ここに既に世俗化への伏線がある。そして理屈をこねるだけの組織神学が幅を利かせて、これが科学技術への伏線になっていくのだ。

つまり、聖書と言う書物以外のすべて否定した結果、その勢いで最低限の宗教性さえも否定して、極めて希薄な「宗教」となったために、守旧の精神も弱まって、自由とかヒューマニズムとか科学と言った世俗の諸要素を、もちろんガリレオに見るように多少の軋轢はあったものの、結果として育てた。つまりキリスト教は自由・平等・博愛を育てたが、それはキリスト教が優れていたためでなく、逆に宗教として劣っていたために道德レベルの自由・平等・博愛が目立って見えただけのことである。だから欧米諸国がこれらを獲得するのは歴史的必然であって早晚棚ボタ式に落ちてくるものだったが、彼ら西欧人達は敢えて争って取った。つまり欧米人は自由等を、自力で勝ちとった血と涙の結晶であって何物にも代えがたいと確信している。そのために表現の自由にも過剰に肩入れするのだ。

ではイスラムには自由・平等・博愛や個人の自由は本来的に無いのか。無い訳がない。ムハンマドがアッラーの教えを広めたのも、そもそもは周囲の人々の相談に乗り彼らのもめ事を解決するのが出発点であったことは、クルアーンにほぼ時系列的に読み取れるし、もし個人の救済よりも組織の存続を優先するのならそれはもうカルトである。カルトが今のイスラムほどに広まる程、人が愚かだとは思えない。ただイスラムの方が後発の分だけ宗教的な骨組が強固なってしまったこと、また使徒パウロのような特異な人物が居なかったために、自由等の道德のように低レベルの物が目立たず、また成長する余地もなかっただけである。田舎のイスラム人がほのぼのとのんびりしているのも、むしろパウロの弊害に毒されていない、人としての余裕のある自然な姿なのだ。

つまり言い換えれば、キリスト教以外のあらゆる宗教にも、自由・平等・博愛等は教えに含まれているのだ。探せば見つかる。だからイスラムも徒(いたずら)に教義に凝り固まって固くならず、あるいは勝手に世界標準の顔をしているキリスト教に向きになる余りに我を忘れるような愚かなことに走らずに、もう一度基礎に帰って自分の教えの中にある自由・平等・博愛を再発見して欲しい。

ただ、このプロセスで厄介なのが、「自由・平等・博愛は自分たちの成果物だ」とするキリスト教界のかたくなな常識である。先にも指摘したように、自由・平等・博愛に対し

てキリスト教の役割は実は単にあだ花であって、キリスト教に何の勲もなければ、ましてや彼ら固有の獲得物でも何でも無い。人類に共通の宗教以前の人としての最低保障であり、基本的人権である。こう正しく位置づければ、イスラムも自分の教義の中に自由等を再発見しやすいだろう。良い意味での宗俗習合である。習俗の分離と習合、これは現代ではどの宗教や文化にも必要な最低限のマナーなのだが、イスラムはこれがまだできていない。

そして再発見して信仰上の余裕が出た所で、イスラムもキリスト教の風刺に徒に過剰反応するのではなく、逆にキリスト教を風刺して笑い倒すほどの余裕を持って欲しいのである。それがイスラムにとっても実は最大に幸福な行き方だからだ。余裕が出れば過激に走ろうとする要求もなくなる。インドのマハトマ・ガンディは宗教間の融和を訴えたが、その本質は互いの宗教の中にある自由・平等・博愛を認め合うことだと、私は思う。

## 11、納得の仕方

今までに「理解する」と言う行為の仕組みを、連続体（点でなく塊で見る）の視点から、主として瞑想によって、何回か見てきました。理解とは、「脳空間内で当該連続体の位置が定まること」でした。で、理解した後に、その事物のあり方を承認するかしないかの段階に進む訳ですが、その承認の一形態として「納得」があります。これは理解の結果を受け入れる側で、かつその内容に反論や留保なく承認する行為で、しかもしばしば、「眼から鱗が落ちる」と言うような鋭い気付き・気付かせを伴うものです。そんな納得の態様について、いくつかの例を通して見て行きます。

### 1、イスラム国の出現はクルド族にとっては好機である（山内昌之先生）。

最初この言述を読んだ時には驚きました。イスラム国とクルド族の実効支配地域はかなり重なっており、潰し合いの喧嘩になるとばかり、私は思い込んでいたからです。そしておそらくそう言う面もあるのですが、山内先生によると「クルド族は反イスラム国の欧米連合をうまく取り込めば、これを梃子（てこ）にして長い間の念願であった独立さえも手に入れることができる」とのことです。これは言われてみるとその通りで、「深い知恵だ」と納得するとともに、目からうろこが落ちました。

かつてルーマニアのチャウシェスク大統領が長期に亘って独裁者で居られたのも、ソ連と欧米の拮抗の間に入って「二重スパイ」のような便利な役割を演じていたからでした。ちなみに、この言明は高名な学者先生によるものなので科学的真実です。科学だと言うことは「言われてみれば当たり前」のはずですが、そして実際に当たり前

ではあるのですが、その気付きの知恵には、当たり前を遥かに超えて驚嘆しました。

2、「僕も家事を手伝うよ」はNGだ。

男性が「僕も家事を手伝うよ」と自発的に参加を申し出る。一見模範的な良い行いのように聞こえるのですが、実はこれがとんでもない。理由は、この申し出が、「家事は本来女性がやる物だ」という間違っただ前提を暗に主張していることになるからです。これも指摘されて「なるほど」と納得しましたが、このケースでの納得の仕方はただ論理のみに依っていますから、デジタル確定論理ですよね。他方納得とは単なる理解以上に心象的な行為です。「深く心象的な行為がデジタル確定論理のみによって生じられることがある」、むしろこちらの方が私にとっては驚きでした。

3、長いラップを買うと、途中でさばけて、返って使いにくい。

サランラップ(商品名)のようなラップを購入するとき、もちろん長い方が割安なのですが、しばしば途中でラップが斜めに切れて使いにくくなり、返って割高になるという意味です。これも「指摘されて納得」でしたが、その納得の仕方を振り返ってみると、一見あたかも論理で納得させられているように見えますが、納得の大元は「同様の経験があること」です。つまり後天的な体験に基づく実感を、その指摘は思い出させてくれて、それで納得に至っている訳です。現実の納得はむしろこのような、体験型の納得が多いように思います。そして体験型の納得の特徴は、すなおに受け入れられることです。論理型の納得の場合は、反論が見つからないための不承不承の納得と言うことも良くあります。「論理の暴力」とでも総称できる現象です。

4、法律に明文化されていないなら、法改正して手当てすれば良い。

かつて小泉改革の時に郵政の簡保事業について竹中平蔵が、「あんな民業を圧迫するほどの規模なのに法的根拠が全く無いのはおかしい」と主張した。これに対して対談相手の評論家が平然と、「そうであるなら法改正して手当てしてやれば良いだけの話でしょう」と指摘し、竹中は答えに詰まって黙った。竹中の主張も正論なのだが、それに対する評論家の指摘はそれを越えたレベルで更に正論であったために、竹中は煮え湯を飲まされた、強引に納得させられた形になった。法理論が、もちろん現実はあるものの、本質的に極めて論理的なものであるため(さもないと平等が保てないし万人が納得できない)、理屈での勝負となる。もし竹中が更に反論しても、単に彼の負けがより鮮明になるだけと言う形にもって行かれた。こう言う弁論術上の技術もある。

5、(何気ない袖の下に)なんだ、分かっているのか。

時代劇の一場で、悪徳商人と悪代官の会話です：

商人「お代官様、何とかお目こぼしを」

代官「お前だけ特別扱いにする訳にいかないのだよ」

商人「これは多少ではございますが、（小判を）包みました」

代官「なんだ、分かっているのか」

ここで使っている「分かる」、これは納得すると心得ているという意味だが、会話の字面（じづら）を追っている限り全く非論理的で、どこでどう分かったのか皆目見当がつかない。納得は深く心象での働きなので、ビジュアルでアナログ的な働きではある。だがアナログ理解は常にここまで論理がないかと言うと、大抵の場合「話の流れ」とか「モチーフ」と言った形で一定の論理が介在するものだ。だからここまで論理の無い魚心と水心、以心伝心も珍しい。

こういう形の理解は、行為の良し悪しは別にして、究極的な人にしかできない（人工知能には創発できない）、超アナログ理解である。そしてこの例は悪い行いの例だが、仏道における悟りも、この例に似て超アナログ的な納得の道を辿る。アナログと言うことは言葉で表現できないということだが、それにもかかわらず高僧は、弟子に啐啄同時（ソツタクドウジ）で、かつしばしば言葉に依って、いきなり悟りにホールインワンさせる。こういうエージェントの働きは、神技と言わねばならない。

以上まとめて、納得とは理解のホールインワンである。

## 12、天気図と密教

天気予報、昔は「当たらない」の代名詞だったが、最近は結構当たるようになった。これは昔が理論のみに基づく予想だったところ、最近はスパコン（スーパーコンピュータ）による数値予報に代わったためである。数値予報の立場からは、気象現象の主要素は熱流動であるから、場の数値解法としては最も発達している。もちろん連続無限の気象を有限回の計算で模擬するので限界はあるものの、今では5km四方を1点で代表するほどの精度になって来て、現状をかなり忠実に再現している。

ここでは議論の都合上、数値予報が連続無限広さの気象場を、忠実に再現しているとしよう。すると気象の数値予報は一種の拡大鏡であり、任意の場所と時間の気温や気圧や風力などを、好きなだけ拾い上げることができるものである。また我々人間は天気図を全体観で観ずることにより、特に低気圧や高気圧や前線の位置やその深さなどから、気象全体の未来予測や、定点での気温の変遷等、知りたい情報を任意の形で知ることができる。



だがここで仮に、この気象図を絵でなく言葉で他人に伝えとしよう。もちろん主要指標、例えば低気圧や高気圧の位置やその深さ、あるいは前線の位置と種類、更には特定地点での気象通報値などを指標に用いて他者に伝えることになるが、どう頑張っても高々有限個の指標に過ぎないので、それらの情報を伝言された他者は、天気図そのものを正確に再現することなどできる訳がない。自分なりに敢えて天気図を描いてみても、まあ「似ていて非なる物」しか描けないだろう。

この例で、実際の天気模様はアナログ連続体であり、密教に当たる。そして高々有限個の諸指標、これはデジタルであり顕教に当たる。密教と顕教はどの宗教にもあるが、密教と言う究極真理に、顕教と言う言葉で迫ることの困難さ、言葉の無力さが、この例で感じ取れるのではないか。そして諸宗教における高僧とは、顕教から密教を悟る力を持った人のことであり、悟りとは顕教から密教を復元するための基本原理である。

一般に事物の表現には3段階ある。一番本当なのがアナログ連続無限自由度のありのままの風景（リアリティ）、その次がこれらの特徴を表現する道具である有限個デジタルの言葉、そしてその言葉の内更に特殊なものとしての数字である。ありのままは各人が見て感じるしかないが、言葉では文章や論理によってその要点のみを、完全ではないがより効率良く伝えることができる。更に数字では識別能力に加えて演算をすることが出来て、情報圧縮の様々な手段を持っていて、多芸である。

つまり人は、真実に対して質や能力が異なる3層の表現方法があって、必要に応じて使い分け、またやはり必要に応じて混ぜて使うことになる。ここでもし、一番情報量の多い「ありのまま」に演算が定義できるとか、あるいは逆に数字が演算込みでありのままを伝えることができれば、これはもう鬼に金棒なのだが、世の中は残念ながらそこまで調子良く出来てはいない。

この3層の観点から見ると、理系の諸科学は最上層の数字で表現するのが基本とする。また社会系の諸科学は最低でも言葉で、しかも感情を伴わない絶対的な言葉で表現しないと科学でない、出来れば数字だが、言葉の場合でも数字に近い側しか使うことはできない。いずれも厳密性のためである。そしてたしかに厳密ではあるのだが、先の天気図の例を思い出してみよう。数字や絶対的な言葉がどれだけありのままを再現あるいは代表出来ていただろうか。かなり無力である。そしてこの無力こそが、科学が厳密に執着する余り持たざるを得なかった固有の残念な性格、限界なのである。

つまり科学は、人を納得させるためのあまたある手続きの一つであるが、多芸で絶対再現性を持つ代わりに、本質をとらえていることは保証されない。むしろ大抵の場合、本質からずれた所で強力な指標として働き、その結果独り歩きした上に人心を惑わして論理の暴力を思うままにしているのだ。これが科学教の実態である。

私が良く上げる例に、血液型人間学や、手相や人相の占いがある。これらの占いでは手や顔の形、それぞれの部分つまり塊の、色や形や勢いや相互作用を観じて、それらの知見を総合して全体観で予言する。重要なのは数値でなく、生まれつきの勘と経験である。また血液型人間学についてはいくつかの統計結果があり、いずれも「性格と血液型に関連はない」と言う結論になっているが、その統計で用いた数字が、現実には連続的に変化する性格の、どれだけ代表的な指標になっているのだろうか。私はやみくもに科学を否定するものではないが、直観が働いた時には本能的に、直観を優先することになっている。

また宗教、特にアニミズム（神道を含む）や多神教の密教は、「理屈なしのありのままだけが真実」との立場である。だからことさらに言挙げ（ことあげ、言葉で説明し解釈すること）をしない。そしてその謙虚な分だけ、ラウドスピーカーでがなり立てる一神教の宣教師達より弱い立場にあるが、また宗教学上は「未熟」と分類されるが、その実最も人にやさしいものでありかつ道徳に堕さない精神修養がある。リアリティは精神を通してしか見ることができないのだ。逆に一神教や最近の新宗教、これらは言葉レベルや論理レベルでことを行うので、効率的ではあるが高々言葉の遊びに過ぎない。

本日は科学信仰と一神教の危うさについて説明しました。

### 13、科学は神聖か

今の世の中は何でも科学、科学万能の時代です。科学は、いつ、だれが、どのようにやっても、同じ結果が出ることが保障されている、つまり全智・全能・遍在の一神教の神様と同じく三位一体ですから、これは至聖、神聖にして不可侵な訳です。少なくともほとんどの人がそう信じています。「非科学的」、これほどの否定的なレッテルも少ないでしょう。超常現象も宇宙人も占いも全部愚か者の嘘っぱちで、さげすむべき行為です。

でも本当に科学をそこまで信じて良いのでしょうか。昨日書きましたように、事物のありようには3段階がありました。即ちありのままレベル、言葉レベル、数字レベルの3段階です。そして言葉レベルは「言葉で書ける」と言う「能力と限界」が付加されたレベ

ル、数字レベルは「明確な数値で書けて演算ができる」と言う「能力と限界」が更に付加されたレベルでした。そして科学は原則として数字レベル、少なくとも「論理言語レベル」で表現されなければなりません。「同じ結果」を保証するためです。

ところがここで気をつけないといけなことがあります。「数字で書ける」と言う情報限定と、「代表的である」と言う情報限定、いずれも同じく「そのまま」レベルからの限定なのですが、これらの限定が同じであるという保証は、全くありません。というかこれら2種類の情報抽出は原理が全く別物ですから、「数値化した情報群が実は現象をほとんど代表していない」と言うこともいくらでもあり得ることになります。つまり科学はしばしば、「本質からずれた所で厳密をやっているので、意味が薄い」と言うことが起こるわけです。代表性を犠牲にした上での意味の薄い厳密化です。そしてこの「ずれた厳密化」が、固有の絶対的な再現性ゆえに、その「ずれた厳密」が独り歩きし、暴力すらふるいます。往々にしてこれが科学の実態です。

経済学に一例を挙げましょう。お金ですからもちろん数字で表現出来て、しかも四則演算可能なので、平均とか分散とか分布形とか、色々な代表値や代表情報を抽出できて非常に便利です。でもこれらの技術で引き出せた数値群が、果たして人の幸せを本当に表現しているでしょうか。一般に、幸せには最低限のお金は必要ですが、それ以上は各人の心の持ちようの方が主要な要素であって、大金持ちでも不幸な人は居ます。大金を無くさないために疑心暗鬼になっている訳です。幸せの国ブータンのGNH(Gross National Happiness)ですら、経済よりはましでしょうが、幸せの主観の5段階評価の星取表の人数集計、つまり民主主義と同じく「深みに関係ない人数と言う数の勝負」になっている点で、時の雰囲気流されやすいものが絶対視されやすく、完全な指標ではありません。

別の例を挙げましょう。70年前の大東亜戦争で日本が勝てなかったことに、「軍人が官僚化して硬直した組織になっていた」と言う理由が挙げられます。たしかにこのころの軍人の昇進は、士官学校の成績順位が重要でした。でも一般的な感覚として、ペーパー試験の点数による順位と言う数字が、そこまで完全な指標でしょうか。戦いは現場です。机上ではありません。日露戦争の日本海海戦でも、バルチック艦隊の退路を押さえたのは、兵学校常時末席で落ちこぼれの、上村彦之丞中將でした。そしてこの機転はロシア軍をして「神技」と言わせています。

更に言葉の例ですが、名作の「星の王子様」では主人公の王子様に、「本当のことや大切なことは言葉では表せないのだよ」と言わせています。欧米人でも繊細な人は、

こう言う真実に気付いているのです。言葉ですら表せないのですから、数値ではもっとダメでしょう。

ですから私は、科学を盲目的に信じるのではなく、常に「科学以上の何物かがある可能性」に注意した上で、科学を拡大鏡と言う道具として利用しています。要するに科学は人を納得させる方法の、あまたある手続きの一つに過ぎません。特徴はありますが絶対的でなく相対的であって、決して神聖不可侵ではないのです。人にとって一番本質なのは納得することであって、科学することではありません。病気は治りさえすれば理由なんてどうでも良いのです。現実的には経験や信仰で納得することも多い訳です。

私が科学をしない理由、少なくとも科学よりも瞑想にふける理由は、他にもあります。科学をするということは、単に発見をするだけでは手続きとして不足で、まず、周辺分野の動向に注視して、自分の研究の位置づけを常に表現できる状態にしておかないといけません。このためには膨大な先行文献を読みふけることが要求されます。ですが、私は今までに、読んでためになったあるいは面白かった文献に出会ったことがありません。ただただ退屈と我慢でした。次に、科学と言うためには証明が必要ですが、この証明段階が、ひたすらデータを取り続ける、テクニシャン的な単調業務なのです。ここでもひたすら退屈と我慢です。私は自分の貴重な時間を、退屈と我慢に捨てたくありません。その点瞑想は、知恵に依る気付きと新アイデアのジャブのような繰り出しです。極めてスリリングです。

もう一つの理由、それは「科学的に確定する」と言うことは「事物を殺すこと」であると言うことです。確定前はミステリーのある仮説であったことも、確定してしまうと理屈がついて当たり前になってしまいます。もはや神秘はありません。しかもしばしば、より知恵の無い、よりつまらない仮説の方が認定されたりします。「大騒ぎして結局当たり前のことを証明しただけ」と言う場合です。そしてこの時点で、智恵のある仮説は永遠に闇に葬られます。そしてまるで虚無のように、つまらない結果だけが記録されます。科学は大抵の場合、世の中をつまらなくさせます。私は「つまらない事実よりも面白い冗談の方が貴重だ」と日々思っています。科学と逆に瞑想は、仮説を誕生させて提起する行為です。殺すのと産むのと、どちらが楽しく生産的でしょうか。

ところで私は、小松左京さん、星新一さん、そして筒井康隆さんの作品が大好きで肌に合うのですが、この3人を「SF御三家」と呼ぶそうです。SFとは”Science Fiction”のことです。この3人の内、小松さんは科学をかなりリアルに利用する作風なのですが、星さんの場合は科学的思考法をシュールに応用した作風です。まさに星さんの諸作



品に於いて、その気付きと物語の展開と落ちは、科学以上に科学の香りがします。科学の教科書以上につまり真偽に捕らわれずに、自由に科学を楽しんでおられます。そして私の一連の瞑想でも、いわゆる「科学ネタ」は結構あるのですが、その科学ネタに対する態度や評価は星さんと同じく、真偽よりも面白いかなにかです。

ですから私の一連の妄想、間違っていることもあるのですが、「間違っているけど面白い」と言う観点から、つまり一神教が得意の異端審問の観点からではなくアニミズムの深い洞察の視点から、見て欲しいと思っています。「面白い所を拾ってやろう」と言う広い心を求めています。人は真実のために真実の奴隷として生きているのではなく、面白いとか美味しいとか気持ち良いとか、そう言った喜びのために生きるべきですし、それがむしろ本来の人のありようだと思っています。苦虫をつぶしたようにただ狭い所の勤勉で居る、これはキリスト教が喧伝してやまない、あるいはマルクス主義が求めてやまない、間違った人間観です。一見立派に聞こえるところが返って紛らわしいのです。言われたとおりに実行しても、天国なんかありませんよ。

#### 14、先鋭化

今話題のピケティ先生は、「自由主義経済では必然的に貧富の差が助長される」ことを解明した。正しく言えば、「今まではそうであったことを、彼が選んだ主要経済指標を元に、解析して導出してくれた」のであるが。先生は解析結果に基づいて、「だから強度の累進課税が必要だ」と説く。ただ、先生の解明はまだ思想になっていないので、①なぜ貧富の差が助長されてしまうのか、②それは自由主義の構造に根ざすも不可避なものか、あるいは③今後もどこでも未来永劫そうなのかといった疑問には答えていない。

ここで「貧富の差が助長される」、これは差別化もしくは先鋭化である。あたかも浜辺に寄せ来る波が突っ立って崩れ落ちるようなものだ。ところが世の中には「ボルツマンの公式」があって、「あらゆる閉鎖系は、自然と平坦化の道を辿る」ことが知られている。分かりやすい例が白黒の基石だ。適当に混ぜると平坦に混じり合ってしまい、「たまたま白黒が分離された」などと言うことはおよそ起きない。敢えて分離するには基石1個1個の色を調べて別の側におくと言う、外からのエネルギーが要る。この極まった状態が「熱的死」で、もはや熱の出入りがありえない程に分布が平凡になる。「反応死」というのも考えられる。

この例と同じで、経済だってもし無作為ならば平坦化するところ、ピケティ先生は「先鋭化する」と言っているのだから、そこには自然な平坦化を打ち消してなお余りある、



何らかの仕組みが存在する筈だ。私はこの動機は、人の欲望と個性、つまり人の本能そのものにあると考えている。人は保身のためあるいは欲望充足のために、出来るだけ多くの財貨を集めたいのだが、それでも、人から奪ってでも集めたい人と、面倒くさいから程ほどで良い人が居る。もちろん希望通りには叶わないのだが、それでも趨勢として、強く希望する人は多く集める。このギラギラした欲望が差別化の要因でありエネルギーである。

特に、「社会における生産総力の向上」には、技術革新等の新規要素を必要とするところ、貧富の差はゼロサムの中での再分配だから、特定の開発要素は要らない。これが、分配の先鋭化の方が総量の増加よりもより速い理由であると、私は考える。そう考えると、「悪の根源は人の自由意志であり資本家がけしからんから革命しろ」という、マルクス主義をデータで支援しているかにも見える。

だが実際は逆ではないか。マルクスは社会を労働者と言う負け組と資本家と言う勝ち組に単純二分して（この単純二分は毛沢東に於いて極限化されるが）、「その内の資本家だけがけしからんのだから、こいつらをどかしてしまえ」という思想である。一方ピケティ氏の結果を私なりに解釈するならば、一介の労働者にも人の普遍として、自由意志と向上の欲望はあるのであり、資本家をどかしても残りの労働者の間で奪い合いと先鋭化が始まるだけなのだ。しかもマルクス主義ではキリスト教よろしく、「労働者は無垢の子羊なので争いはない」とイデオロギーにしている、理論上は欲望がないことになっているので、欲望は地下に潜ってなおのこと陰湿になる。そして今の共産主義諸国の現状があるのだ。

ではピケティ氏の提案の「強い累進課税」はどうだろうか。マルクスが忌み嫌った「階級の固定」の解消には役立つだろうが、欲望の目標が無くなることも意味するために、共産主義同様に個人のやる気を引き出すことができなくなって、生産総量は落ちてくるだろう。これはソ連等で既に実証済みだ。だから結局「適度の累進課税」と言う中庸、一神教でなく多神教の悟りである中庸に落ち着くのだが、この中庸がどの辺かについてはアニミズムよろしく感得するしかない。中庸や穏当は、過激や先鋭よりもよっぽど難しいのだ。

さて、先鋭と言えば最近のイスラム国の先鋭化が目立っている。イスラム教は「寛容と穏健の宗教」と言われるところ、一部ではあるが過激に先鋭化している一派が居る。こちらの先鋭化の動機は何であろうか。思うに一神教であるための、中庸という歯止めのない、過度の信仰心であろう。いくら「信仰の基礎は寛容」でも、中庸の歯止めが構造として内在していない以上、先鋭化のリスクは常にある。キリスト教だって自分の

論理的整合性だけのために、十字軍などと言う近所迷惑なことを勝手に始めて大殺戮したし、宗教改革だって大殺戮はなかったものの、先鋭化の一種であった。

ところでこのイスラム国の先鋭化、客観的にはどう測るのだろうか。ピケティ氏の場合はそもそも数値を扱っていたので、それが幸せの指標としてどれほどかは別にして、客観化できた。だがイスラム国の場合、適切な数値指標がない。だからイスラム国が「我々は先鋭化していない」と強弁すれば、これに反駁するには高々定性的な状況証拠しかないことになる。結果的に水掛け論になる。ここが「証明」の難しい所だ。

では多神教諸国では先鋭化はあり得ないのか、と言うとそうでもない。先の大東亜戦争に於いて、やはり一部であるが日本も先鋭化した。なぜ歯止めの中庸が作用しなかったのだろうか。それはこの時期まで日本は神道と帝国主義が習合した、「神帝習合」の時期にあったために、結果として中庸が薄まってしまっていたからである。「大和魂には敵はない♪」と言った、「神道の形で先鋭化する」と言う現象となって現れた。日本の歴史を振り返ってみると、この手の「神風思想」は、本来なら鎌倉時代の蒙来袭・撃退の後に現れた方が自然であったところ、実際には現れなかった。この時期はまだ神帝習合していなかったためである。近年のオーム真理教の先鋭化、これはこの教えが基本的には多神教であるものの、宗教管理技術に於いてハルマゲドンのような一神教要素を、巧みに取り入れていたためである。

日本の習合の良い所は、時代が変わってふさわしくなくなるとすぐに辞める、身代わりの速さである。実際明治維新とともに神仏習合は1日にして消えて、神帝習合に道を譲った。その神帝習合も敗戦の一日でなくなり、平和憲法の時代になった。ただここでの問題は、平和憲法の場合自らの意思で勝ちとっていないことである。

米国を始め連合軍は、日本の暴走の根っこには個の自由の尊重に対する希薄性があると見抜いて、家長精度でなく「自由・平等・博愛」の精神を植え付けようとした。これは正しかったと思う。そもそも多神教の神は人に近い所に居るので、ことさらに個人の権利を叫ぶ必要もなかったのだ。だが勝ちとったものでないのだからありがたみを感じず、最近「押し付け論」が横行するなど、「戦後は神道と個人の自由が習合したか」と聞かれると、まだしていないように思う。日本がどんな価値観を持とうとも個人の尊重は基本であるが、習合していないためにかつての精神主義の復古の風が感じられるのは、近未来の不安要素である。

そして同じことはイスラムにも言える。イスラム教もこと個人の自由に関しての意識は希薄である。そしてイスラムに本当に個人の自由が定着するには、自ら勝ち取るのが

正道である。今は残忍さと横暴さばかり目立っているイスラム国の宗教的先鋭化であるが、日本のようにキリスト教国が外から武装解除させるのではなく、イスラムの内部から、同じく信仰の発露とはいいながら、極端なイスラムを正すようなつまらない先鋭を制止する動きが生まれて、イスラムも本来は持つ一人ひとりの救済の方向に信仰の重心が進むならば、これは結果として中庸を知るところとなり、イスラム教が進化して真の世界宗教になることができるのではないか。

## 15、厳密の落とし穴

厳密、非常に重要な心構えだ。物事の解明にも伝達にも、厳密でないと不要な混乱を招く。特に契約とか判決など、如何に非厳密を避けるかが、基本のキの字だ。学問や科学だって例外ではない。内容以上に厳密が命だ。論文では感情的なあるいはあいまいな表現があると、それだけで査読が却下される。この流れで、最近「学術論文から避けるべきだ」とされている重要な単語が結構ある。特に頻出の日常用語に多いが、これは日常に多様な用い方をされるために、その意味が拡散してしまっているためだ。いきおい、学術論文は変に難解な文章になる。そしてその割に中身を感じない。

そのようにして避けられている言葉に「文明」がある。文明とは辞書に依ると、「精神的にも物質的にも発達した一連の状態」を言うそうだが、これって数学で言う「無定義用語」に近い。もうこれ以上掘り下げようがない程の基礎概念なのだ。文明の重要性を最初に取り上げたのはトインビーだろう。彼はもう70年も前に著書の「歴史の研究」で、「文明の邂逅」と言う概念を提起した。振り返ってみるとこのころはまだ厳密に関しておおらかな時代だった。この思想は後にハンティントンに引き継がれた。彼は著書の「文明の衝突」で、冷戦以後の世界の動力源が文明という単位であることを論じた。20年ほど前のことである。そして彼の思想は日系人のフランシス・フクヤマに依る「歴史の終わり」に引き継がれている。この辺は今のイスラム国との相克の解説にも用いられている。

ところがハンティントン以降の文明論の論説は、トインビーとは違った意味での批判にさらされた。「文明の強調が国や民族概念を軽視している」と言った内容的批判もあったが、むしろ「文明という語があいまい過ぎて学問に耐えない」との強い批判が出たのである。「読み手に依って幾様にも解釈され、発散してしまっって学問的意味をなさなくなる」と言うのだ。

この批判は決して的外れでない。厳密でない表現は、もし悪意や偏見のある人に使われれば、どんな曲解や我田引水にも、場合によっては正反対の意味にすら用いられてしまう。だから学問としては厳密に定義しなければならない。それはそうなのだが、文明という言葉は基礎的過ぎて、これ以上厳密化の方法がない。だから結局「使うな」と言うことになるのだが、これではおよそ科学の世界から日常が完全に排除されてしまう。

似たような立ち位置の言葉に「本能」がある。本能も日々何気なく用いているし、誰もが該当する精神が実存すると信じているのだが、あいまい過ぎると言う理由で学問からは排除される傾向にある。しかし本能という語を使わないで精神分析に関する論文を書くのはかなり難しくて、結局回りくどい上に、単に周辺部分をうろうろするだけになってしまう。ちっとも本質を攻められない。「自然」と言う語もそうだ。「何が自然かは分からない」と言う訳だ。

別の例を挙げよう。「狩猟民族 vs. 農耕民族」、「一神教 vs. 多神教」、「西洋 vs. 東洋」と言った分類がある。曰く、「狩猟民族は各構成員が自分の安全を守りつつ成果を上げる性格となり、農耕民族は集団で物事を協調作業する民族性となる」。ところが学問の世界では、こう言う単純思考は誤解の元凶であり愚かの代名詞だとして軽蔑される。しかし我々一般人にはむしろ素直に納得できる。人の理解とは「大まかから微細へ」と、方向が決まっているのに、「いきなり微細に行け」では、人間性無視なのだ。

もしこれをマルクスや毛沢東のような二分法として捉えるなら、たしかに危険である。だが一般的傾向としての捉え方なら、自然だろう。学問の世界には、「厳密でないで学問でない」と言う厳しい掟、信仰があるが、人の理解とは「いきなり点ほど細かい理解」と言うよりは、「先ず大ざっぱに捉えて、それから段々深掘りして行く」のが普通である。だが学問は一神教の神のように、いきなり超越した存在なのだ。

世の中に「厳密こそ命」と言う信仰の業界が、1つくらいあっても良いとは思う。「極端のありか」を押さえることは、ある意味人の知恵の広がりを示す適切な指標だからだ。でもこう言う、人の思考方式に逆らった信条を余りに強固に振りかざすと、結局人に一番身近でおなじみな、つまり一番解明してほしい所を、返って「厳密化不可能」という理由で除外することになってしまう。人の身近でない所をいくら必死に解明しても、それは多分に自己満足に過ぎない。

良く、「日本語はあいまいかつ多義すぎて、情報伝達言語としては劣っている」という議論がなされる。この議論ですぐれているとされる言語は、英語等のヨーロッパ諸語

だ。たしかに英語等はほとんど記号論のように厳密で意味の広がりも重複もなく、情報伝達には数学並みに優れているだろう。だが、人が相互に伝えたいのは情報だけであろうか。むしろ心情をこそ他者と共有したいのではないか。であるならば言語は自然に広義かつ多義になるであろう。何よりも多神教のダイナミックなめくるめく世界観の、自然な反映になっている。一神教徒は神の奴隷（細胞）であるから、業務に係る情報伝達以外は不要なのかもしれないが。

学問用語に見える言葉のデジタル化、デジタル化自体が危ういことなのだが、さらに自分で自分の首を絞めて、解明領域を重箱の隅に縮めている。極めて非生産的であり、「科学や学問は近々行き詰って閉塞状態に陥るのではないか」と真剣に心配するほどだ。だから私は自分の瞑想行為を、敢えて「学問ではない」と宣言した上で、「文明」とか「本能」とか「自然」と言った用語をふんだんに使って実行している。ではその多義性について、どうやって責任を取るのか。どう言い訳をしても結局ある意味、自己引証やトートロジーに陥ってしまうのではないか？

この愚かな時代の愚かな質問よ、そんなことは健全な常識に基づいてみれば、自明（Self-explanatory）であろう。

## 16、若いときの怒り

今日は、自分のために自分のことを書きます。若い時丁度青春時代に、世の中全般に言い知れない怒りを覚える人は、意外と多いようだ。ただその大抵は、教師の保身や親の俗物性と言った不条理な世の中への反発とか、見てくれが悪く不器用でもてない自分への自己卑下とかだ。だがもっと深刻に、自分の怒りが何であってその対象と原因が何であるかさえも分からない、非情に深い怒りもある。この手の怒りが、解決のきっかけもなくいつまで続くか分からない分だけ、実は一番深刻である。私もこの病気に長い間罹患していた。

もちろんこの手の怒りを全く持たないで、青春時代を終える人も多い。その手の人々は大抵、世の中に良い人として順応し、それなりの大学で箔と手に職を付けて身丈に応じた会社に入り、つつがなく家族を養って目出度く定年退社し、植木や近所づきあいなどしながらこの世の生を全うしていく。一番迷惑でない、その意味で最も模範的な、人畜無害な人々である。あるいは順応に巧みで一銭にもならない悩みなど無駄だからしない、極めて世俗的な順応者たちである。



また、ここまで凡庸でなくても、自分の怒りと言うか不満のありかと解決法を、さほど手間をかけずに見出して、その不満のエネルギーを良い方に向けて結構な文化の創造に至る、幸せな人もいる。三島由紀夫がその好例だ。彼は「丈夫（ますらお）願望」が自分の違和感の根源であると気づき、その根源を掘り出す自己内省の文章を次々に発表したところその美学に共鳴する多くの読者を得、そしてその美学の総仕上げに自衛隊に押し入って檄を飛ばした上で割腹自殺し、自分の美学を完成させた。ただ、こう完璧にうまく行く人も極めてまれである。

他方で、「言い知れない怒り」そのものを発表した人もいる。石川達三の「青春の蹉跌」は、極めて頭脳明晰な主人公が、その明晰さを周囲に少しも理解されずに返って凡庸な人生を強制してくる愚かさに怒って、うっかりガールフレンドを殺してしまい自滅するというストーリーである。この小説を「おごり高ぶる物は久しくない」と言う教訓小説と読むこともできるが、これではつまらない。やはり正当評価されない怒りのリアルな表現と見るべきだろう。境遇の不条理に対する怒りには他にも、村上龍の「限りなく透明に近いブルー」とか西村賢太の「苦役列車」とかがある。

さらに、出来合いの規律の押し付けと言う精神的暴力に対する言い知れない怒りを表現した作品に、ちょっと古いが「エデンの東」がある。私は映画で見たが、主人公は、何かと言うと聖書を振りまわす高圧的な父親への反抗から、父親に従順だった真面目な兄を陥れて発狂させる。「エデンの東」とは「失樂園」のことである。当時この映画は若者の熱狂的な歓迎を受けたから、同じような「言い知れない怒り」は多分に若者に共通なのだろう。

さて、私も若いころ、向けどころも掴みどころもない言い知れない怒りがあった。時期的には大学生時代である。このタイミングはおそらく、平均的なケースより遅いだろう。多くの怒る若者は、高校生時代に既に怒っている。私の怒りのきっかけは大学や学問が全く期待外れだったことだったが、その怒りはすぐに東京と言う人間砂漠の疎外性や小心性、そしてさも子羊のように範を垂れる周囲の凡庸な偽善者どもに向かって行った。

なお、当時はもう学生運動は衰退していたが、それでも民青とか革マルの同級生は居て、彼らは「キリスト教マルクス派」みたいなものだから、しつこく伝道（勧誘）して来た。だが私は彼らにも何も感動しなかった。まだ世間知らずの私だったとは言え、これら非日本的な異物をかき分ける能力は備わっていたようだ。もしこの時期にキリスト教の宣教師に声をかけられていたら、間違いなくぶん殴っていたことだろう。私は子羊の偽善者は反吐が出るほど嫌いだ。村上龍のような底辺の叫びの方がまだ共感で

## 瞑想録（その5）

きた。あと、共産党は嫌いだが、ヨド号やダッカ事件を実行した赤軍派には、「何もかもぶち壊して自らも自爆する」と見えていたので、多少感じるものはあった。

こうして感動なく大学を出て、期待と感動なく会社に入り、「世の中どうせこんなもんさ」とあきらめて長々と、自宅と会社のピストン運動を漫然と繰り返してきた。だが、それも末期になった今頃になってようやく、私は自分の怒りの本質が分かってきた。要するに「いかなる既成服も着せられなくなかった」のだ。愚かな奴ほど古ぼけた既成服をさも偉そうに押し付けてくる。学問だってエライセンセー達だって、この点は変わらない。この「愚かに出来上がった社会とその押し付け」に、私は怒りを感じていたのだ。怒りの内容を長々書いたが、そしてそれほど長く怒っていたが、答えは「魂の自由」にあった。

ここ約1年私は瞑想活動をして、その結果をこうしてブログ記事に書き留めている。これら一連の活動の結果、いつの間にか怒りが消えている自分に気が付いた。もちろん瞑想の内容には正しい物もそうでない物もあるし、瞑想のきっかけであり目標でもあった「多神教的アルゴリズムの発見」は、当初想定していたよりももっと、「異次元の気付き」や「骨太の方針」が必要で、まだ先である。それにもかかわらず怒りが取れたと言うことは、私の場合瞑想行為それ自体に癒しの効果があるということだろう。

瞑想の起点は「連続体と蓋然論理」と言うまったく斬新な視点である。それ故に先例がないので、自由にかつ大いなるファンタジーで発想の自由な飛翔ができ、新たな気付きが日々やってくる。加えて私の理想とする境地は、無為自然であり知的興奮であり無限自由度の新世界なのだ。結局私はこう言う魂の自由な飛翔を長い間求めていたことが、今になって分かった。もし私に絵の才能があったら、おそらく若いうちにそこにはけ口を見出せただろう。またもし文章がうまかったら小説に、自己存在を見出せただろう。だが残念ながらどちらの才能もなかった。そして瞑想が、特殊な才能や技法の習得なしに可能であるために、それ故に私に天賦の受け皿になれたのだ。

もっとも、「生まれ変わって楽になった」からと言って、若いころ軽蔑していた「愚かな既成の枠組み」、特に科学や学問や会社仕事を、「またやろう」などと言う気には、依然として全くなならない。もはや怒っていないだけで、これらの「愚かさが賢い物に見え変わった」などと言うことは全く無い。私は当面、2匹の猫（嫁と娘）が居る限り、面倒な世の中や周囲の人々とは没交渉を貫いて瞑想を続けたいと、強く思う。

最後に、「瞑想したいらなぜ出家しないたのか」と言う問いに答えたい。それは寺院等での修業の型や形式、これら形式すらも私にとっては縛りだからだ。能を完成した世

阿弥はその著書の「風姿花伝」で「型から入れ」と言っているが、これは既存の文化の完成者に当てはまる言葉である。私には既存は全て縛りであり、前例のない全く自由な魂の飛翔を希求する。「先人に習わないと結局自己流になってつまらなく終わる」、そういう話は知っていてかつ疑っていないが、「型にはまって高まるよりも自己流により不発で終わる方がよっぽど快感だ」、これが私の答えである。現状の方が、あたかも一人で庵を結ぶがごとくに、よっぽど精神的出家状態にあるのだ。願わくはこの状態が永続して欲しい。

## 17、高等遊民

最近、1世紀ぶりに「高等遊民」という敬称(?)が復活している。高視聴率のTV番組で引用されたのが、きっかけだそう。この称号は、文豪の夏目漱石が名付けたものである。当然ながら学術用語ではないので、この名称の切れの良い定義はないようだが、私は「東スポ WEB」の以下の説明、「大学などの高等教育を受け卒業したのに、経済的に不自由がないため就職もせず、毎日読書などをして楽しむ人。裕福なので物欲がなく、出世や金儲けはゲスで、精神性を重要視する。太宰治は豪農の息子で、高等遊民の最たる人物の一人」という定義が一番しっくりとくる：

<http://www.tokyo-sports.co.jp/entame/entertainment/364436/>

私も自称高等遊民ではあるが、もし私がその「元祖高等遊民」なる模範的人物を一人挙げるとすれば、西行法師を推したい。彼は北面の武士(近衛隊幹部)と言うエリート職にあり文武両道でもあったが、一切を捨て、娘を蹴り出してまで決然とこの世を捨てて出家した。つまり「出世や金儲などけはゲス」そのものだった訳だ。それで、そこまで決然と出家したからにはさぞかし「仏道を極めるのにわき目もふらずまい進した」のかと言うと、なぜかどうもそうでもない。一人で庵(いおり)に籠り、あるいは天台教学を学んだり、あるいは高野山に30年も寄寓したり、またあるいは修験道に参加して峰駈けをしたり等、色々してはいるが、どうもどれも「余裕でやっている」と言う感じで、必死さはおよそ感じられない。そして彼が最終的に行きついた境地は、和歌を読むことによる風雅の道、それも仏教でなく神道の十八番である、「もののあわれ」であった。

その和歌も、「作品を後世に残そう」とか、「新たな境地を後進に垂れよう」とか、そう言った気持ちは全く無くて、ただ気の向くままに気の向いた時に、ポロっと歌ったのがいつの間にか積もっただけである。彼は「山家集」と言う私家本を残しているが、そしてそのお陰で我々はもちろん、彼以降の日本文学の巨匠たち、例えば芭蕉や世阿弥や本居宣長等の思索に貢献して日本文学の転換点、屋台骨ともなっているのだが、それもせいぜい自分の備忘録かあるいは近い友人に見せる程度で、「これをネタに

芥川賞を取ろう」などという野心は全く感じられない。そもそもそんなゲスな気持ちがあつたら、あれだけの澄んだもののあわれなど歌えない。

結局思うに、高等遊民として一番肝心なのは、「目先の得に目もくれない自由で高い精神性」と言うことだろう。その結果それが誰かの役に立とうが立たなかろうが、それは単に結果論であって、どうでも良いことなのだ。と言うことは、仮に平日の昼間は凡庸な会社員として時間を賃金に変換していても、もちろんこれすらしないで人生の全部を自分の精神の余裕に充てられればそれに越したことはないのだが、こう言う「アフターファイブの人」も、その精神に於いて高等遊民と呼べるのではないか。

以前私は自己紹介で、「自分の趣味は瞑想だが、これが競馬や昼酒に比べて高度だとかそう言うことは一切ない」と断った。この表明は今も変わっていないが、こと高等遊民に限るならば、そして付き合いの苦手な私が敢えて知り合いになりたいと思う人とは、やはり競馬や昼酒の人ではなく、高等遊民なのだ。理由は、瞑想が趣味なのはその自由な思索にあるところ、その思索に刺激の無い付き合いなど無駄の限りだからだ。西行もかつての友人が花見のついでに立ち寄って世間話をしていくのを、極めて迷惑に感じていた。

つまり、思索や精神修養は、単なる気晴らしを越えているので、思索用の時間を無駄に垂れ流したくないのだ。こういう意味での「効率主義」を望む人は多いのではないか。ちなみに競馬や昼酒でも、それを単なる気晴らしを越えて、「道」としてやっている人は居る。こういう人たちは交流の意味がある。

ところで私が西行や芭蕉を敬愛するのは、彼らが高度だからという理由でなく、私が愛してやまないアニミズム的日本精神のもののあわれの芸術家、美の具現者だからであるからだ。だがもしそうであるならば、熱心な信仰により必死に自己否定に明け暮れるキリスト教徒、聖教新聞を隅から隅まで読んで実践する創価学会員、更には反日を生きがいに基地反対闘争に明け暮れるプロ市民たちも、単に私とはしびれる対象が違うだけで、彼らは彼らなりに「素晴らしい高等遊民だ」と言わなければならないのだろうか。ちなみにかれらもその道では高い精神性を有している、少なくとも本人たちはそう思っていることだろう。

徹底して個人主義であり相対主義の現代では、理屈の上では「彼らも高等遊民だ」と認めないといけないのかもしれない。少なくとも反論の材料はない。だが気持ちの上で、彼らを高等遊民とは認めたくないのだ。それはおそらく、彼らが高等遊民の定義に欠けた所があると言うよりも、本義での高等遊民ならおよそ持たない不潔な要素を



有しているからであると思う。そしてその要素とは、不自然な嫌らしさ、あるいは「イデオロギーやカルトにだまされたロボット人間」と言う不潔さ、潔くない清くない感じであると思う。もちろん理屈で応酬すれば「自然体とは何か」と言うことになり、結局は水掛け論になってしまうのだが、そしてそこが弁論の難しい所だが、そもそも「人としての自然」、これを忘れて理解できないとは、人として致命傷であるように思う。

高等遊民と言う語感にある「何か潔く清貧な感じ」、これは既存のイデオロギーや社会秩序及び既成の手続きを超越したところに有るのであって、この「超越した何かを彼らは生み出してくれるかもしれない」、そう言う知的期待を、我々は高等遊民と言う語感に感じるのだ。つまり「今の西行」や「次の西行」の待望論である。

高等遊民、この理屈抜き語感からは、競馬や昼酒の方が、反日に精を出すプロ市民よりもずっと遥かに、高等遊民に近いと思う。不潔よりも無駄の方が、全然悪でない。つまり競馬や昼酒は少なくとも「ただの遊民」ではあるのかもしれないが、プロ市民の方はもはや遊民ですらないのだ。高等遊民とは生き方と言うよりも、究極的にはむしろ美学である。

## 18、数字は万能か

一般に数字は万能であると思われる。たしかに、ラベル機能に加えて加減乗除と言う演算機能があり、これに加えて、未知数の導入を通して関数や微積分と言う精緻な体系に発展を遂げた。しかも数値は常に絶対的であって主観や相対と言ったあいまい性が入らない。「身長170cm」と言えば、それが高いか低いかは別として、誰が何と言おうと180cmにはならない。つまり詭弁に負けない。もはや「数値化なくして科学なし、科学でなければ信用なし」と、一般の人々まで信じている。

でも科学にも、どうしても言葉に依らないと表現できない分野もある。例えば文芸評論だ。三島由紀夫の「滅びの文学」、この精神を例えば数値の大小や足し算で表現するとか、あるいは統計学で表現できるとは思えない。別の例として、悟りとかもののあわれなどは典型だ。こう言った真に精神的な、従ってその概念が人にとって本質的であればある程、数値表現からは遠くなる。これはどういうことだろう。数値は万能ではないのか。

だが現実世界では、多少強引であっても数値化は強く望まれる。その典型例が裁判の証拠としての筆跡鑑定だ。筆跡が似ているかいないかは、素人でも素朴に感じるところである。そして筆跡鑑定の専門家もいる。ここで問題は、「筆跡が同一人物による



ものか否か」と言う問題だから、もし統計学にかかるならば、例えば「水準 0.05 で有意である」などと表現出来て、証拠主義・論理主義・弁論主義の裁判では強力な証拠になるのだが、筆跡と言う連続無限自由度については、「極めて似ている」と専門家が証言しても、「極めてとは具体的にどの程度か」と反問されれば答えようがなくて、結局証拠としては不当に弱く扱われてしまう。つまり「本質的であればある程証拠採用されない」と言う重大な逆転現象、矛盾が発生してしまう。

以前に「天気図と密教」と言う記事で、「現実・言語・数字」これらは全て異なっていて、言わば3階層を成していることを論じた。また「科学は神聖か」の記事で、「本質表現性と数値可能性は原理が全く異なる」ことを論じた。つまり数値はしばしば、本質と外れた所で一所懸命に厳密をやっている訳だ。だが、そうであるならば「数値をうまく拡張して、本質をよりえぐるように持って行けないか?」、こういう素朴な疑問と提案は、あってしかるべきである。

仮に今の問題が数値でなくて、先の3階層の内の真ん中の「言葉による表現」だったら、こう言う拡張はかなり可能だ。もちろんデジタル有限近似の限界は超えられないものの、その詳しく表現したい部分について、新たな言葉を創成すれば良い。そう言う作業は現に普通にやられていて、専門用語とか業界用語とかがこれに当たる。例えば魚市場の競りなどは、素人は聞いていても分からないが、専門家には競りの対象の魚等の細かい性格や特徴を如実に表現する便利な、そして必要不可欠な道具である。その業界の必要に応じて適宜拡張された、しかし依然として「言語表現」の内側に包摂される道具なのである。

しかし残念なことに数字にはこの器用さが無い。先ほど「数字には演算という強力な付加価値がある」と表現したが、この利点が逆にきつい縛りとなって、「数字の演算可能性の利点を残したままこれを拡張する」と言うことができないのだ。つまり「演算可能性」はカニの甲羅のように両刃の剣であって、カニを守りもするがそれ以上成長できない締め付けにもなっている。そしてカニと違って「脱皮」、これがおよそ不可能だ。少なくとも私はまだ思いついていない。と言うことは、「もし勝手に拡張してもそれに演算が適用できないのならその拡張は結局数値の拡張ではなくて言葉の拡張に過ぎない」と言うことになる。

以上を総合すると、人類が生き物の頂点にあるように、数字も表現の頂点にあるのだが、この数字と言う物は、①しばしば本質からずれた所で厳密をやるものであり、しかも②この欠点を補う融通性は一切無くて、③逆に独り歩きを助長させる、と言う、二重三重にたちの悪い表現手段、言わば一種の妖術なのである。人もたちが悪いが、数

字も実は筋が良くない。もっとたちが良い「数字」を探そうと思うならば、現状の数字は進化の袋小路にあるので、全く別の発想で探さないと見つからないということだ。それすら見つかるという保証はないが。強いて言えば縛りの弱い「いい加減」がキーワードだろう。

先の筆跡鑑定の例に戻ろう。実は筆跡の特徴を数値化しようという研究は情報工学の分野で結構なされている。基本的には筆跡一般に現れる特徴的な要素を数え上げて、それらの特徴を強さによって「客観的に」数値化し、その上で統計解析にかけると言うものだ。分野としてはOCR（手書き文字認識）や顔認証（生体認証）等の分野である。現に顔認証は、何億人も区別できる、しかも気分や病気で顔が歪んでいても正しく認証できるという意味で、スグレモノとして実用化されている。この実績に鑑みれば、「実は何だって、最終的には悟りやもののあわれだって、例えばホルモンとか人体磁場とか生理活性変化とかの測定で測れてしまうのではないか」と言う気にもなってくる。つまり「所詮は近似であることは認めるものの、十分強力な近似ではないか」と言う立場あるいは信仰だ。

それにも拘らず数値筆跡鑑定は、まだ裁判の証拠として用いられていない。筆跡の方が顔よりも記号に近い分だけデジタル近似がたやすいように見えるが、現実にはそうではない。それは筆跡の方が顔よりも指標を規格化しにくい、簡単に言えば「どんな優れた指標群を想到しても、必ずそれらを裏切る重大な抜け穴が存在する」と言うことだ。

つまり顔認証等は主要な切り口（指標）を事前にうまく選べて、それは何百個かもしれないがとりあえず事前に規格化できて、その指標に於いて数値化すれば何億人も区別できるが、これはあくまでも「区別する」と言う問題であって、「千変万化な特徴を読み取る」と言う問題ではないのだ。つまり筆跡鑑定や手相占いは、「どの切り口に特徴があるか」が、個体や個人に寄って全然違う。つまりこれらの鑑定作業はまず、「どの切り口がその対象にとって重要か」を見出すことから始まり、その見出しで実に作業の半分は終わっているのだ。そして作業の残り半分は切り出した切り口とその周辺の詳細を、詳細に特徴抽出することだ。だから生体認証（区別）のように事前に指標（切り口）を決められてしまうと、鑑定ではほとんどのケースで本質から外れる。顔認証と言う区別はデジタル近似できても人相学、人相でその人の性質や過去未来まで予言することができないのは、特徴が規格化を拒んでいるせいである。加えてその切り口の発見は、風水や四神思想のように骨太で、従って味わい深くなければならない。つまり勘と経験の世界である。

数値近似の領域が広がりつつあるのは認めるものの、それですべてが解決できるとしたら、もう人類に新大陸はないと言うことになる。新大陸がないのなら、解明しつつした先にはもはや、中世暗黒時代しか待っていない。

## 19、大虚無

今日も自分のために自分のことを書きます。先日の記事の「若いときの怒り」の続きです。私は大学時代、大学とか学問には絶望して、今後もこれらに何の期待も抱かないだろうとの確信もあった程でした。ですが、趣味で始めた「世界の歌と踊りの文化人類論」には、長いことのめり込みました。専門の勉強（理系）をそっちのけで、趣味の方ばかりやっていました。当時はまだ、ネットとかホームページとかがなかったので、ガリ版刷りのレジュメを知り合いに配ったりしていました。某国の大使館の広報誌に記事を連載したこともあります。関連して外国語も何カ国語か、それなりに習得しました。これらは今でも生きています。

ところが、それほどのめり込んだ文化人類論なのですが、なぜか大学卒業の少し前に、達成感に達してしまいました。達成感と言うと聞こえが良いのですが、飽きて冷めてしまった訳です。もちろんこの分野を本当にやりつくした訳ではなくて、やろうと思えばまだ、多くの国の未解明の曲目や特徴など、細かく掘れば無限にあるのですが、なぜか「あとは全部似たり寄ったりだ」と言う「悟り」あるいは「達観」に達してしまいました。しかもその達観は、ある日突然にやってきました。つまり、「昨日までやる気満々だったのに今朝起きてみたら白けていた」と言う状態だったのです。そして2度と盛り上がりませんでした。

その白け状態の後に残ったのは、「もう何もやりたいことがない」と言う大虚無でした。やりたいことがなくても、日々は着実に消化しないといけませんから、3度の飯を食ってはだらだらとしていましたが、何とも高揚感がありません。そうこうしているうちに卒業・就職となりました。そして「社会に出る」とか「金を稼ぐ」、もっと言えば「歯車になる」と言うことに何の希望も期待も持てず、実際その通りに面白くもなんともなかったのもので、私はその時から10年単位の、「長い大虚無期間」に突入しました。あたかも「花畑を過ぎるとそこは出口のない長いトンネルだった」と言う訳です。

こういう虚脱感は今の人でも、例えば「長いゲームでゴールした後」とか「大失恋の後」とかにあって、まあこういう場合は少し間を置いてから目先の変わったことをやると治るものですが、私の場合はそうではありませんでした。会社の仕事も努めて真面目にやったりしましたが、私の目指している所と全然違います。しかも一度大充足を知って

## 瞑想録（その5）

からの虚無だったので、その落差は大きかったです。そこで瞑想してふと気付いたのですが、私にはもっと何か、まだおよそ掴みどころがなかったのですが、どうしてもやりたい、あるいは使命としてやらねばならない「何か」があるのではないかという気がしてきました。つまりこの別の引っかかりがあるから、他の何をやっても満たされないのではないかと。

この「何か」を把握するまでには、ひたすら長期の内省が必要でしたが、その結果見えてきたのがこのブログのテーマでもある、「アナログ連続体蓋然論理の世界」でした。今から7年ほど前のことです。これは従来の科学と全く異なる立場ですから、それまで「目標物は科学の先の未解明の所にある」と思いこんでやって来た、その出発点から間違っていた訳です。いつの間にかマスプロの戦後教育や世界標準に嵌められていたということです。続いて新視点からのパラダイムシフトが始まったのが4年ほど前で、本格的に瞑想行為が立ち上がったのが1年前でした。そして今では大虚無は消滅して、毎日が充実しています。

ところがここ数日、新たな不安が頭をもたげてきました。この最近1年の瞑想に係る充実感、これがはるか昔の学生時代の文化人類論をやっていた時の充実感と類似していることに気付いたのです。もし同一ならば、「今の瞑想だって今から1年後や数年後には達成感に達してしまい、また大虚無の暗黒時代がやってくるかもしれない」、そういう大いなる恐れです。

そこで自分を今一度振り返ってみました。すると、こう言う「達成感と虚無」のペアは、文化人類論だけではありませんでした。大学入学直後に理系学問に飽きたのも、その前の高校時代にやりすぎて煮詰まってしまったためとも考えられますし、瞑想に入る前にやったいくつかの趣味、街歩きや御朱印集めや陶芸、フェスタ巡りや美術館博物館巡り、こう言ったものも始めた当初は物珍しさで足しげく通い、とことん調べましたが、今は一巡感がして出不精になっています。と言うことは瞑想だってなおのこと、もうすぐ一巡感が来ないとは断言できません。余計に怖くなりました。

歴史を紐解きますと、人生の途中から意欲を無くした有名人に、東海道中膝栗毛で有名な十返舎一九が居ます。彼の老後は単なる名義貸しで、自分で新作を書く意欲を喪失したまま、この世を去りました。死ぬまで道をたしなむ人も居る中で、こう言った「白ける人」も結構実在している訳です。有名人や大家ですらこうですから、私ごときが、「もしかしたら明日白けて大虚無のまま寿命まで生きるのかも」と言う恐れは、あって普通の訳です。

そんな私が最近注目しているのが、西行法師、白隠禅師、仙厓（がい）禅師と言った人たちです。これらの先人は皆悟りに至っていますが、つまり達成している訳ですが、だからと言ってその時点で白ける訳でなく、それぞれの道で余裕のある楽しい人生を送り、あくまで結果ですが多くの作品を残しています。これらの先人は、仏教説話集の十牛図で言うところの十番目の「入廬（てん）垂手」の段階、つまり「悟った後世俗に降りるがなおその悟りを忘れない状態」に至っています。そして悟りに至った後の彼らの生き方を一言で言うと、「頑張らない」「余裕でやる」です。西行も、「万巻の仏典を読みつくす」のではなくて「庵を結んで折に触れて歌を読む」日々でした。ちなみに弓とか乗馬とかの技術は捨てています。

ですから彼ら先人に鑑みると、私のこれまでの大虚無に至った性格とはつまり、「一時熱心にやりすぎる」と言う一種の若気の至りだったようにも思うのです。ですから今度の瞑想の趣味を大切にするためにも、私は「根を詰め過ぎない」「頑張りすぎない」を肝に銘じて行いたいと念じています。

## 20、許しの国日本

「日本は理念がない」とか「日本人は節操がない」、良く聞かれる指摘だ。特に外国人からの日本国批判にこの手が多い。要するに「日本人は行動の基本原理が見えないので、将来を予測できないし対応のしようがない」、あるいは「日本は政治の方針がいとも違ってまるで思いつきで、信用のしようがない」と言う、言わば「未開で未熟な国民性」批判である。特に理屈で事物を取り仕切る欧米諸国には、およそ理解不能だろう。

たしかに日本と言う国は理屈や理念では動いていない。だが「全くのでたらめか」と言うところではなくて、日本人には明確な行動原理がある。それは「許し」だ。根に持たないで過ぎたことは許す、懐の深い性格である。大元はもちろん洗練された汎神論と農耕的勤勉性にあるのだが、その精神はいくつも、形になって現れている。

その典型が「敵味方合同供養」の習慣だ。江戸時代までの間、日本には多くの内乱があって敵味方に分かれて闘い合ったが、一旦戦いが収まると、「敵兵たちも良く戦った」として、戦没者を敵味方の区別なく合祀し、まとめて供養する。このような供養塚が日本には沢山あるが、アジアの他の国も含めてこのような習慣があるのは、日本だけである。そしてその根本にあるのは許しだ。この例の場合、見方も殺した敵兵たちを、懐深く許している。



記紀にある「国譲り」はおそらく最初の内乱であろうが、譲った（負けた）出雲の神は「大国主命（おおくにぬしのみこと）」として、日本の主要な神に取り入れられている。「負けた方は奴隷にされる」のが世界の常であるところ、日本の場合は昔から、許して尊重して取り入れるのである。ヤマトタケルは逆らうクマソを抑えたが、その際に敵のクマソから「ヤマトタケル」の名をもらい、以後その名前を使い続けている。これも一種の許しである。

以前に、「日本は習合の国だ」と言う記事を書いたが、そしてそもそもこの「習合」と言うあり方自体がすでに一種の許しなのである。そしてもっと典型的なのは、この習合が時代に合わなくなると、今までの習合の善悪全てを許して1日で解消し、新たな習合へ切り替わる「変わり身の早さ」である。明治維新で時代が変わると、それまで長く続いた神仏習合は、その弊害も含めて許してその日で全て解消して、新たな神帝習合を始めた。そして先の大東亜戦争が終わるとその敗戦の日に神帝習合を弊害も含めて許して、新たな神個習合とも言えるべき状態に入っている。その証拠に日本人は、占領軍の長のマッカーサーを日の丸の小旗を振って迎えた。そして終戦の際に先の戦争の指導者の責任も問わずに許し、また無差別空襲や原爆も、またシベリア抑留（拉致）も全て許して今がある。もしこれが隣国だったら、「千年恨（ハン）」などと叫び続けたことだろう。総理大臣だった伊藤博文の狙撃も、日本は許している。

この融通無碍さが欧米等外国人には不可解に、あるいは節操の無さに見えるのだが、実際は矛盾を含めすべてを「もののあわれ」として水に流し、賠償や謝罪をことさらに求めない、広い心なのだ。それは心を醸成する文学にも深く見えている。例えば「安寿と厨子王」とか「浦島太郎」とか、ひたすら無実の者がなぜかひどい目に会うのだが、それも許して「もののあわれ」として受け止めている。能や歌舞伎の多くの演目も同様の構造で、これら許しの構造は日本人のDNAとなっている。

ところでもし日本が単に「7の7度（たび）許す」国であったとしたら、それは宗教的にはあるいは立派かもしれないが、国や民族としては如何にも薄っぺらだ。そして幽玄の極みであり、本質は矛盾にある所の「もののあわれ」がこれほどに薄っぺらな訳がない。つまり日本民族の許しは、同時に「原状回復の原則」をも含んだ、言わば「層の厚い許し」なのである。日本にも仇討物はいくつも存在している。忠臣蔵などが代表的だが、これら仇討物の心は、「許す、ただし本来の姿には回復せよ」と言うものである。忠臣蔵でも喧嘩両成敗の原則さえ復帰したら、それ以上なんの恨みも引きずっていない。

これら「許しと原状回復」の精神の大元は、日本の恵まれた四季自然と、勤勉で実直な国民性である。現に四季自然は人の良し悪しに関わらず、移り変わった後に必ず復元する。日本人の慧眼はこれらの現象を「宇宙の原則である」と見抜いている。そしてこの理解の上にあるいは基に、極めてダイナミックな八百万（やおよろず）の記紀神話がある。「捨てる神あれば拾う神あり」、この膾炙した言葉からも「許しと原状復帰」が読み取れる。外国人は決して許さないの、日本人特有の許しが、気まぐれにしか見えないのだ。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」と言うことわざもあるが、許し合いの懐の深さこそが世界平和の基本ではないか。

先日新聞の人生相談で若い母親が、「赤ん坊の泣き声がうるさいと隣家から苦情されますがどうしたら良いでしょう」とした質問に、ベテランの回答者が「先んじてひたすら謝り続けましょう」と回答していた。たしかに日本人は、先に謝られると「まあ良いか」と許してしまうところがある。もしこれが外国だったら下手に謝ると、「お前は罪を認めたのだから当然に出て行け」となるだろう。結果は真逆だ。私はこの人生相談のやりとりに、日本人の許しの構造の典型例を見た思いがした。

日本は今クールジャパンで「おもてなし」の心を世界に訴えている。ここでおもてなしとは、「見返りを求めない親切」のことである。つまり親切をする前から既に相手を許しているのである。ただし何でも許す訳ではなくて、マナーは当然に守ってもらうし、守れない人には正しいマナーを教導する。つまり「許しと原状回復のワンセット」である。

先日映画の「深夜食堂」を見た。この映画の魅力は、食堂のマスターの懐の深い暖かい人情味なのだが、その助言のキーワードもやはり「許し」であったように思う。例えば自分を許せない人に「もう許しなさい」と諭すのだ。ただし不遜な客には商売抜きに叩き出す。神聖な場所に土足で入り込もうとする者には、当然に自衛と撃退の措置を取る。「人生なめるなよ」と言う訳だ。ただし膨大な賠償は請求しない。こういう映画が受ける点も、許しが日本人に如何に深く染み入っているかを雄弁に物語っている。

「おもてなしプロジェクト」は、意地と言う近視眼的な損得行為に変えて、日本しか発信できない、より洪くて柔軟な日本流の「深い許し」を、世界に発信する良い機会ではないか。

## 21、逆理の共通構造

典型的な逆理である「悟り」から始めます。悟りとは禅の究極目標で、その内容は①ちっぽけな自分の中に仏が居てその仏は全宇宙であること、そして②日常の些細な

事物にも仏が居てその仏は全宇宙であること、に深く気付くことです。いずれも「最も小さい物の中に最も大きい物がある」と言うことで、これは矛盾です。

ではこの悟り、禅はそもそも仏教の一派で、仏教の真理とは諸行無常、つまり「常なる物はないので執着してはならない」と言うことですが、この諸行無常と先の悟りとはどういう関係にあるのでしょうか。これは、物事は常に入れ替っていると言うことで、つまり今大きな物が次の刹那にはしばしば小さく、今小さい物が次の刹那にはしばしば大きくなっていると言うことですから、これも大いなる矛盾で、かつ先の悟りと実質的に等価です。

以前の私の記事で、「日本人はイデオロギーとしての諸行無常を神道アニミズムの『もののあわれ』として受け入れた」と指摘しました。さてここで、もののあわれとはどういうことでしょうか。まず諸行無常で空ならばそれはあわれです。そしてあわれならばはらはらと、それぞれその瞬間のみが全ての意味を持ちます。そう言う意味でこれらは重なり合います。更にアニミズムとは全ての事物に神が居ると言う気付きで、その八百万の神を体系化したのが神道ですが、もののあわれとは「全てが理屈を越えている」と言う感動ですから、これも矛盾で、層が厚い気付きでもあります。

さて、逆理とは「本質的に矛盾である物」ですが、一番有名なのは「ウソつきの逆理」と呼ばれるものです。これは「自分は嘘つきだ」と言う言明ですが、もし本当にウソつきならこの言明は嘘でないのでウソつきでない、またもし本当は正直ならばこの言明は正しくなって実はウソつきだ、どっちにしても矛盾になってしまうと言うものです。

似たような例で「親殺しの逆理」と言うのもあって、自分がタイムマシンで時間をさかのぼって親を殺したら自分も生まれてこないはずだと言う逆理です。つまり「表の中に裏があり裏の中に表がある」と言う形で、これはまあ中国思想の陰陽道を連想させますが、いずれにしろ真逆な物が同居していると言う意味で、悟りや諸行無常と本質的に等価な矛盾です。矛盾は科学ではご法度なので、逆理は科学の外にあります。

ところでこの逆理を言い換えたものが、ゲーデルの不完全性定理です。この定理は、「もし体系が無矛盾ならば、その中に真とも偽とも判定できない要素が必ずある」と言う定理です。体系自身には矛盾がない、つまり「体系は完全なのにその中に判定不能なものがあるって実は完全でない」、そう言う意味でこの定理も実は一種の逆理なのですが、上記のように定義し表現すると定理として取り扱われて、科学の一部であると待遇されます。しかもその証明は先の「ウソつきの逆理」の「1回ひねり」を用いるの

で実質同一なのですが、ウソつきの逆理は科学の外、不完全性定理は科学の内です。「鬼は内」みたいなものです。この待遇の違いもある意味逆理です（笑）。

このような「1回ひねり」に、メビウスの帯があります。これはハチマキを1か所で切って半回転させてつないだもので、3次元空間内で概念できます。ただし「裏と表」という区別はなくなります。ここで「裏と表」を「ウソと正直」に並置してみると、どちらも「1回ひねり」の結果で同じ構造ですが、メビウスの帯は矛盾ではなく、ウソつきの逆理や親殺しの逆理は矛盾です。ですから矛盾の本質は形式の違いでなく常識の違い、「半分死んで半分生きている」と言う状態を人が概念できないと言う常識に起因していることが分かります。

では現実問題として、ウソつきの逆理と同等の「親殺しの逆理」で、「その人は生きているのか死んでいるのかどっちだ？」と聞かれると、困ってしまいます。これに対する正しい答えは、「情報が不足していて決められない」という答えになります。この決定不能な状況は、先の不完全性定理の決定不能に似ています。ここで象徴的に見えるように、逆理はバラバラでなく、お互い繋がっている訳です。そして悟りに係る矛盾の本質も、情報不足とは少し違うのですが、この「更に深めて解明することはできない」所にあります。

簡単な例を挙げましょう。あなたが銭湯に行って中に入ろうとしたら、中から多くの人が出てきました。この時あなたは、①大勢出て行ったから湯船は空いているだろうと喜びますか、それとも②大勢出て行くと言うことはそれに比例して中に大勢いることだから湯船は混んでいると悲しみますか、と言う問題です。私はこの問題を「銭湯のパラドックス」と呼んでいます。この問題の正解は「設定条件の情報が不足していて決められない」です。この「体系内では決められない」と、今までの逆理の「決められない」は似ています。

更に「 $1-1+1-1+1\cdots$ 」と言う無限級数和の解は、0でしょうか1でしょうか。実はこの数列の演算の順番をちょっと変えるだけで、0と1どころか、あらゆる有理数の解を作れます。ここにも条件不足による決定不能の問題があり、その決められなさ加減は、「0か1か」の二者択一程度ではなく、 $[-\infty \sim +\infty]$ まで連続に広がり得るのです。ここまで行くとこれは連続体の世界です。このように矛盾と連続体は深く関与しています。

最後に「矛盾」の語源ともなっている「矛と盾（たてとほこ）」の問題を見ます。「あらゆる盾を打ち破る矛」と「あらゆる矛を防げる盾」の問題です。これも構造は「ウソつきの

逆理」と似ていて、つまりこれだけの条件では決められません。体系外からの追加情報が決定に必要です。しかも情報を追加する前の、言わば量子順位のように潜在的に可能な状態は、単に「どちらか一方が強い」と言うものではなく、「その瞬間に爆発する」と言うのとてつもない、つまり実質に $\infty$ の解もありえます。先の級数和のように予想外に大きなエネルギーを、あたかもビッグバンのように出し得るのです。

このように、欧米の一神教論理学では負けの象徴である矛盾ですが、実は「矛盾があるからこそ大爆発や大化けもあり得る」ような、層の厚い物であることが分かります。それはもののあわれや悟りも同様で、矛盾ゆえに深みが出て、深い真理に至れる訳です。もののあわれと言う深い真理は爆発です。そしてこれが東洋哲学の深さです。矛盾こそが、水と油である点を連続体へと遷移させます。悟りは連続体で、蓋然論理の世界です。

最後にこれらの矛盾ですが、好奇心のある人は「その矛盾のより詳細な構造を分解して見せて下さい」と願うことでしょう。残念ながらこれはできません。連続体の相互作用の原理により、分解すると本質が欠落してしまいます。だから悟りももののあわれも逆理も、そのまま体験で受け取るしかないのです。今までに悟りを分解した人はいません。高僧も悟った段階で完了(ワンラ)します。単にしみじみと感じれば良いのです。「連続体が常に分解不能だ」とは言いませんが、これらの矛盾は密結合しているので、これ以上分解できません。まさに密教の世界であって、直感し感得するしかありません。

## 22、会社が嫌いだった理由

「自分のために自分のことを書く」の今日は3回目です。1回目は「若いときの怒り」、2回目は「大虚無」でした。

私は大学を出て会社に入る(実社会に入る)当時、これらの「門出」におよそ何らの期待も抱けなかった。特に「第一志望の企業に落ちた」とか、そういうことではない。実社会にお決まりの、「指示されて決まった仕事を機械のように正確にやり続ける」とか「自己保身しつつ世の中をちゃっかり渡る」とか「プチブル的に小さな家族に集約農業的な幸せを感じる」、更には「自由を捨てる代償としていくばくかの賃金をもらう」などと言うことが、およそ茶番の田舎芝居で、意味など全く感じなかったのだ。

世の中には、「会社で活躍しよう」とか「一旗揚げよう」とか「趣味を実益に変えてしまおう」と言った前向きの優良青年も、多くはないだろうが結構居る。そしてそこまででな



くても多くの人々は、「まあ世の中こんなもんさ」とか「他にやりたいこともないし」とか「仕事はとにかく付き合いと宴会は楽しみだから」とかで、何となく気楽に人生を過ごしている。だが私の会社嫌いはそう言う尋常の度を遥かに超えていた。ただただ嫌でいやで、虚しくてむなしくて、胸が張り裂けそうになっていた。およそ救いのないおよそ出口のない、暗闇ばかりの永遠の奈落に落ち込んで全身打撲で身動きが取れないかのようにであった。

それでも最初の10年くらいは、多少の人生勉強にはなった。一言で言えば、世の中や組織と言うものがどれだけ底抜けにバカバカしいかについて、学校や教科書と言った文部省の形だけのきれいな教育が教えてくれない、貴重な体験をさせてもらったことだ。日本には徴兵制がない。徴兵されれば嫌でも命をかけて、生き延びるためにはどれだけどのようにズルをしなければならないかを、実地で教えてくれる。だが徴兵制の無い日本では、会社が軍隊の役割を果たしている。そう言う意味ではありがたかった。

例で語ろう。私は学生時代に、古代ローマ帝国のユダヤ属州での物語を読んだことがあるが、その一場面だ。被支配民であるユダヤ人の長老たちが新任してきたローマ帝国の総督に、「人数は我々の方が圧倒的に多いのです。お互いの利益のために我々と仲良く、領分を尊重し合って安住しませんか。総督だっていつまでもこんな辺境に居るよりも、早くローマに帰りたいでしょう」と政治的妥協を持ちかけ、賢い総督もこれを了承する場面があった。私はこの、悪代官と悪徳商人のような利己的な妥協の構造が、学生当時は全く実感できなかった。だが会社で工場勤めをして、現地雇いや下請けと交渉して行く過程で、この事情を実感するに至れた。まさしく人生の生きた勉強である。そしてこれら一連の「勉強」以来、自分の性格に渋みや深みや重みが出たように思う。その意味で、会社生活は全くの無価値ではなかった。

それにしても皆が喜ぶ仕事上がりの宴会、これは不思議だった。昼間に自分を殺して得た金を、夜にドンチャン騒ぎをして使ってしまう。だとしたらこの1日は何のためにあったのか。1日寿命が短かったのと何ら変わらないではないか。こんな日々を毎日繰り返すとは、これ以上の愚かと刹那、シシュープスの神話もないだろう。そもそもそう言う酒の飲み方は、酒の聖霊に失礼ではないか。時間の無駄、金の無駄、話題作りに頭を使う無駄の三位一体だ。会社は1円も出さないくせに「ノミネーションは社員交流に重要です」などとふざけたことを言う。昼飯の「連れ飯」だって息抜きの自由時間の拘束だった。

## 瞑想録（その5）

だいたい会社なんて鉄火場なのだよ。金を儲けたい奴がそのためだけにやって来て、得をする奴も損をする奴もいる。それをたまたま隣に座った奴と「一期一会のお付き合い」をするなんて、全く理解不能だった。一体何に踊らされて酔生夢死をしているのだろう。

まあそんな人生勉強も10年もすれば学び終って、でもこれと言って自分を生かす方法が見つからず、不本意ながらダラダラとサラリーマンをし続けつつも、何か「根底から間違っていて時間を垂れ流している」感がぬぐえなかったのだが、最近になってその理由がやっと分かってきた。およそおぼろげで、言葉はもちろん心でもとても見えてこないのだけど、私には別の重要な使命があって、会社仕事や社会の付き合い（近所づきあいや親戚づきあい）はこれらに無益どころか、真逆で有害だったということだ。

でもその「使命」が余りにもぼんやりしていて掴みどころがないので、自分でももどかしくて仕方がない。こういう状態が何年も長く続いて、私はほとんど精神病、ノイローゼになりそうだった。崖淵まで行った。当初私はその「目指す物」が科学の最先端のもっと先に有ると思い込んで、ドンキホーテのごとくに必死に「科学を突き抜けよう」とあがいていた。

そして最近になってやっと輪郭が見えてきたことは、その「理想郷」は科学の外に有る、つまり確定論理や点集合の外に有って、絶対再現性や実験の積み重ねの外に有るということだ。言い換えれば小学校以来ずっと受けてきた欧米式画一教育のその根底からして、間違っていたとはまでは言わないが私の欲しい境地では全く無かったということだ。これらの、物心がついて以来ずっと「これ以外に正義はない」と教えられ続けていた物が、そもそも私の使命と違っていただけから、これをひっくり返すのは本当に長い時間がかかった。そして人生も後半になった最近になってやっとその「目指すところ」の輪郭が見えてきたという訳だ。

この気付きがもう10年早ければ、会社なんかさっさと早期退職して庵（いおり）にこもり、「立って半畳寝て一畳」の幸福な、西行法師のような人生を送れたことだろう。こうして最近になってやっと、私がなぜあれほどに、自由を求め続けたマンデラ氏のごとくに会社が嫌だった理由が分かってきた。それは我儘でも何でもなかったのだ。天命や理想郷と真逆の、むしろこれらを汚す方向を強制されていたということだ。だから私にとって「会社嫌い」は、魂の叫びだったのだ。

私は今、「グローバル＆ファンタジー」の中にいる。ローカルに制限されもしなければ、事実のみに縛られない、極めて居心地の良い境地だ。やっと自分の人生が正方向の回転を始められた。願わくはこの状態が天の恵みによって1日も長く続くことを。

## 23、占いについて

私は常々、「人の思考の本質は確定論理（絶対）でなく蓋然論理（相対）だ」との立場から、「科学の絶対性と言う空想」について、このブログで多くの記事にしている。そうであるならばその私は、「科学を越えた超常的なもの、例えば占いを当然に信じているだろう」と言うことになる。そこで、私は果たして占いをどの程度どのように信じているのかを、検証してみた。

占いと言ってもその種類は無限に多種多様である。そこで、身近なところで夢占いから始めたい。昔の人は今の人よりも東西を問わず、夢のお告げを深く信じた。占い師に依る夢判断を尊重して、時には戦闘開始の可否と言った自分の命にかかわる事項まで、夢のお告げで決めた。似たような占いに、出立する際のお日柄の吉凶とか方違えとかがある。

「夢は潜在意識の表れ」とよく言われる。この言明には真理が含まれていると私は思う。つまり夢が暗示するヒントはしばしば深い意味を持つのであって、夢を言下に「非科学的」の烙印で捨て去るのは、余りに惜しいと思う。私もしばしば夢を見る。最近だと「隣家が火事になった夢」とか、「見知らぬ他人の家に忍び込んだ夢」とかだ。そして夢判断サイトによると、「火事の夢はエネルギーを暗示して吉夢」であり、また「忍び込む夢は未解決事項を抱える暗示で要注意」であるとのことだ。しかもこれらの予言は、直観はもとより多くの事例の上に成立しているので、絶対ではないものの蓋然的に真であると言う。

そこで自ら見た夢を顧みるに、たしかにそう言う含蓄の深い示唆である場合もあるだろうが、私はここに2つの問題点を見出す。第一に、人は夢の始めから終わりまで全てを覚えている訳ではない。第二に、夢は多分にビジュアルであり言葉に変換する時に重要な情報が落ちてしまう。加えて第三に、人は夢を、あたかも映画のようにスクリーンで見たと思っているが、実際はそこまでデジタルでなく、肝心なところは詳しく周辺は粗く描かれて平面2次元でない。第四に、夢の個々の画面よりもそこに流れる雰囲気（楽しいとか怖いとか）の方がしばしば重要だ。

自分の見た夢を実際に振り返ってみると、その意味するところは夢占いサイトにあるような象徴的な示唆よりは、前の日にたまたま読んだ本のちょっと印象に残った所のようなものが多かったりする。だから総合して、夢はしばしば重要な示唆を含むものの、決して常にではないので（蓋然的なので）、信じ過ぎずに「ヒントの1つ」位に、軽くもなく重くもなく受け取る態度が重要ではないか。

では、人相占いや手相占いはどうだろうか。これらの占いは夢に比べて、間接話法による情報落ちはない。つまり専門家が直接に相を見ることができる。ただしその専門家が、自分の見立てという心象を依頼者に告げるのにやはり言葉に頼るので、間接話法が全く無い訳ではない。他方で手相等を自分で、占いサイト等をヒントに観た場合は、経験不足により特徴を的確に見出して意味を把握することができない。ではこれらの諸問題を一応置くとすれば、手相占いや人相占いは完全と言えるだろうか。

ここで足相を考えてみる。足にも個人差があり、かつ足の部位と内臓に関係があるとする説もあるが、手や顔に比べて明らかに平坦であり、情報は少ない。つまり足相と言うものが仮にあるとしても、そこから得られる情報はごく僅かである。とするならば、手相や人相も、足相よりは遥かにに多弁ではあるものの、その人の現状や過去未来の全てを見通せるほど、そこまでの情報がある程に起伏に富んでいるとは思えない。つまり総合して手相や人相も、あくまでも蓋然的に真であって、事物の重要なヒントを呉れはするが、その意味で決して無視できないものの、第一に全ての特徴に意味がある訳ではない、第二に全ての状況がつまり被験者が知りたい任意の情報が相に現れている訳ではない、の2点に留意すべきではないか。結局私はこれらの占いの予知を、「注目すべきヒント」として扱っている。

では話を更に進めて、易占い（六十四卦）やタロット占いはどうだろう。これらも哲学や人生論としては大変示唆に富むものである。だが、「たまたま引いた卦（カード）がその人の運命だ」と言う決め方は、「全ての出来事に偶然はない」との確定論的な仮説に立脚しており、この確定性が賛同しかねる。つまり蓋然論理の立場からは、こう言う「調子の良い」ことはそうそうありえないので、直ちに信じてはいない。

更に誕生日占いや星座占いの類は、「同じ日に生まれた人が同じ運命を辿っている」という経験は全く無いので、これらもちっと信じていない。では血液型人間学はどうかと言うと、これも形式的には誕生日や星座と似たようなところがあるものの、血液型に依る性格の特徴は経験により感じるところがあるので、私は信じている。姓名判断はどうかと言うと、姓名一体として座りの良さとか響きの良さとかがあるのは認めるが、他方でこれが人生を左右するとは思えないので、信じていない。姓名判断で結婚を決



めると言う類のことを私はしない。神社のおみくじも「偶然は必然」を前提にしてはいるが、将棋の成金よろしく「凶を吉に変える」こともできて、人生のスパイスとしては面白いのではないかと考えている。

総じてこれら占いは、蓋然的な智慧を鋭くえぐるところがあって極めて興味深いので、私は程度の差こそあれ、常に参考にしている。ただしあくまでも参考程度だが。そして一般に、「どの占いをどれだけ深く信じるか」は個人の選択と自由である。ただし中には、「靈感商法」のように金儲けが目的でわざと脅かすとか、あるいは「除霊」などと称して暴力をふるうようなあくどい物も巷にあふれているのも事実である。そうなので、占いに対してどうしても自信の無い人は、大変味気ない人生にはなってしまうが、「科学以外は信じない」と言うローリスク・ローリターンの、利率の極めて低い貯金のような人生を選択した方が、無難であると思う。

こう言った詐欺まがいが紛れ込む主な理由は、「占いは非科学的」と言うレッテル貼りに依って、占いの世界にまだ光が当てられていない為である。つまり科学信仰が返って、「超常現象のうちの際物を野放しにする」という、非科学的結果を生起しているのだ。これは一種の矛盾であり、科学信仰のダークな側面である。これら超常現象は蓋然性を前提にしないと光が当たらないので、その環境整備をしたいためにも、私は日々蓋然論理を瞑想している。特に科学教が崇め奉る数字や論理は、物事の品格と言う絶妙な事項を全く表現できない点にも、注意すべきである。

なお、「宗教や政治活動のイデオロギーにはまりやすい人＝オレオレ詐欺に騙されやすい人＝占いを何でもすぐに信じてしまう人」という構図があるので、自分が思い当たる人は注意してください。

### 24、オーム真理教

今年はサリン事件から20年と言うこともあって、オーム真理教が再び注目されている。しかも教祖の逮捕以降も、信者は減るどころか増加していて、麻原の息子や娘が事実上の後継者になって延命を図っていると言う。その割にこの手のカルトがなぜ人を惹きつけるのか、その辺は十分に解明されていない。この種の問題は色々な要素がからむために、徒に学問の基礎に帰らずに、むしろ核心を一気に突かないと話が発散してしまう。オーム真理教及びより広くカルト一般は、①既成宗教の良いところ取り、②「真理」を述べるのでインテリが陥りやすい、③悟りはある程度あるが自己的愛がない、④個人よりも教団の存続を優先する、と言った特徴を持つ。

先ず既成宗教の良いところ取りであるが、オームの場合基本はタントラヨガ（バラモン密教）で、神との完全合一を目標とするが、仏教の悟りと解脱も取り入れている。特にチベット仏教の金剛乗（ヴァジュラヤーナ）の影響も強い。ただ、これだけだとバラモン教も仏教もともに多神教なので、混合しても特に問題はないが、実は宗教団体管理運営技術に於いてキリスト教等の一神教を取り入れている点で、異端に分類される。具体的にはハルマゲドン等の終末理論による信者のこけ脅しや、唯一神の座を占めるグルへの絶対帰属、更には献金の強制と信徒の徹底したこき使いと伝道至上主義などだ。これらは混ざると本当は、それらの境界で矛盾が生じるのだが、それに気付くと「転んだ」の烙印で目をつぶらせる仕組みになっている。修業や努力や自己犠牲の強調も一神教的だ。

次にインテリがはまりやすい点であるが、これはイデオロギーが変に高度に本当らしくできていて知的好奇心を満足させることと、実はインテリほど科学を疑いかつ既成宗教に飽き足らないで居るところを巧妙に突いて、「うちに入れば本当の宗教がある」との迫力を見せているところが、だましの仕組みである。ややこしいことに彼らカルトの教理は、「間違っている」とまでは決めつけ難い。むしろかなり、本物よりも本物に見えるのでインテリたちが寄って来るのだ。丸で荒唐無稽なら誰も相手にしないだろう。この「如何にも本物」、これがカルトの重要な特徴である。いきなり刮目（かつもく）するような真理を次々に語り始めたら、むしろ疑った方が良いのだ。

オームを含むカルトでは世俗の宗教のように、「悟りたいなら雑巾がけも修業の内だ」などと言う、回りくどいお行儀のようなことは一切言わない。いきなり真理の言葉と悟りに至る訓練を始める。しかも論理整然とである。これで現状の世俗宗教に飽き足らないインテリたちはコロっとなって行ってしまう。しかもしばしばグルが「奇跡」を見せたりする。これでもう「求道する素直な人」は盲目にグルの虜になる。そもそも疑うことの少ない人が、精神的に更にマヒして、一切を受け入れるようになるのだ。この手のカルトは、「都合の良い真実は言うが、都合の悪いことは言わない」と言うディベートの技を使うのだが、その言わない所にまるで目が向かなくなってしまう。この辺はオレオ詐欺を疑わずに信じてしまう人に似ている。また、「技術一辺倒」は近代の欧米風の技術至上教育の成果、副作用でもある。

オームが重要視している経典にヘーヴァジュラ（タントラヴァジュラ）がある。この経典では死をも相対化している。つまり世の中な常識と異なり、「死は絶対悪でない、悟りのためには死や殺人もありだ」と教えている。これは悟らない人が使うと極めて危険な思想なので、直伝や相伝で師から限られた高い弟子のみに伝える秘密の教えであるべきなのだが、彼らは公然と口にし、平然と使う。ただこの相対の教えは、「仏に会

「つたら仏を切る」と言う禅の教えと通じるところがあり、たしかに極めて高い真実の側面を持っていて、だからこそ「バカな奴のために作られた常識になぞ縛られたくない」と感じている自称インテリには目から鱗の、誰も語らない究極の真理に見える。他人はどうでも良いから自分は悟りたいと言う人々には誘蛾灯だ。

ただこの教えも本来は、「死は悲しい物だが避けられないのならせめて捕らわれないようにしよう」とか「現世では報われなかったもののその分来世では報われる」と言った、この世に現にある不条理を補うための論理であるところ、オーム真理教は、「この世のバカどもを今のようにダラダラ生かしておいても返って不憫だから、さっさと殺して輪廻転生させてしまえ」と言うように、愛なく真逆に解釈して、その結果平然と、むしろ愛により、サリンを撒いた。この「そもそも庶民は全員ダメでバカだ」と言う点に、とんでもないうぬぼれと明白な事実誤認がある。全ての悪の原点と言って良い。

ここで第三の特徴である「愛の無さ、慈悲の無さ」が出てくるのだが、オーム真理教は愛とか慈悲と言う、悟り技術の習得と言う技術面に限れば邪魔なものを、一切捨てて無視した。そしてその分より早くかつより高く、「悟り」に至れる。これが自称求道者の求めに合致して、今でも信徒数が増加していると言う形だ。世の中一般には欠損や欠陥は不利な条件だが、麻原はそれを逆利用したと言う訳だ。そして効率良く「悟り」のみに達して、その達観から終末における正しい心構えとして、衆生を殺して早く輪廻転生させると言う選択肢を、当然の如くに選択している。だから、この一連の論理が依然として正しいと信じている以上は、オームはいずれまた、同じ殺戮を繰り返すだろう。

なぜオーム真理教には愛や思いやりがないのか、それは時系列的には教祖麻原の、目が悪くいじめられた過去等の、心に沈殿した恨みや憎しみ、つまり「この世に愛なんてないのだよ」とか「愛ほどの嘘なんか無い」と言ったひねくれた過去が救済されずにいるためだが、彼はそれを意図的に、「この世の愛は低俗で誤りだ」と言う論理にすり替えて自己正当化した。その結果彼は、自分を慰めかつ高みに至れると言う一石二鳥を得ている。「自分さえ悟れば他人なんかどうでも良い」とは、何とちっぽけな乗り物（ヒーナヤーナ）であろう。こんなものは悟りでも真理でも何でもない。

では彼にストレートに「あなたは愛がない、愛の無い悟りはむしろ危険だ、それは宗教ではない」と言ってやれば良いのか。ここに難しい問題がある。世の中は中世までは、絶対王権や権威宗教が支配する「絶対の世界」であった。こう言う世の中では、合わない人は息苦しいかもしれないが、何が正しいかは確定している。ところがルネッサンスから宗教改革を経て自由平等博愛のリベラリズム時代に進むにつれて価値観が多

## 瞑想録（その5）

様化し、絶対の無い「相対の時代」に入った。すべてが相対の時代では、例えばキリスト教とイスラム教は相容れないが、それはどちらかが間違っているということではなくて、どちらもそれぞれの立場で平等に正しいと考える。科学技術の発展もしばしば「昨日の常識は今日の間違い」と言う価値観の反転をきたしたが、これがなおのこと世の中の価値観を徹底的に相対化させた。

だからこの徹底的に相対化された時代に於いては、「隣人に施す」愛も、「バカな庶民をさっさと輪廻させる」愛も、これらは互いに異なっているが優劣の付くものではない、つまり麻原の「狂った愛」も、麻原独自の立場に立てば全然狂っていない、あたかもイスラム国が異教徒の首を切ろうが「どこが悪いのだ」と言うのと同じ状況になっている。麻原が間違い（本気で信じている）なのかペテン師（実は信じていない）なのかは分からないが、多分両方の面が混じっているのであろうが、彼は今死刑囚として牢獄に入ったものの依然として、「私こそが真理であり愛であって、間違っているのは凡庸なバカ庶民と権力だ」と思っていることだろう。カルトに騙されない心構えとは、言葉の上手さに騙されずに、そこに真の愛を有するか否かを見ることだ。「教団の存続か個人の救済か」という究極の二者択一で、個人の救済の方を選ぶか否かだ。

ここまで自分にうぬぼれて地獄道にまで落ちているオーム幹部の奴らを救えるのは意外に、精神修養は無用でひたすら愚直に「神の救い」を繰り返すだけの、キリスト教の伝道師なのかもしれない。

2015. 03. 20